総社市埋蔵文化財発掘調査報告 24

茶臼嶽古墳

墳丘確認調査報告書

２０１６年３月

岡山県総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 24

茶臼嶽古墳

墳丘確認調査報告書

２０１６年３月

岡山県総社市教育委員会

総社市埋蔵文化財発掘調査報告２４　　正誤表

	誤	正
２頁	調査組織　（平成２６年度） 総社市教育委員会 教 育 長　山中　榮輔 教育次長　矢吹　政行 ・ ・ 主　　事　村田　晋 臨時職員　田中　富子（整理担当） 臨時職員　犬飼　眞弓（整理担当） 総社市埋蔵文化財学習の館 館　　長　平井　典子	調査組織　（平成２６年度） 総社市教育委員会 教 育 長　山中　榮輔 教育次長　矢吹　政行 ・ ・ 主　　事　村田　晋 総社市埋蔵文化財学習の館 館　　長　平井　典子 臨時職員　田中　富子（整理担当） 臨時職員　犬飼　眞弓（整理担当）
２頁	調査組織　（平成２７年度） 総社市教育委員会 教 育 長　山中　榮輔 教育次長　矢吹　政行 ・ ・ 臨時職員　谷山　雅彦 臨時職員　田中　富子（整理担当） 臨時職員　犬飼　眞弓（整理担当） 総社市埋蔵文化財学習の館 館　　長　平井　典子	調査組織　（平成２７年度） 総社市教育委員会 教 育 長　山中　榮輔 教育次長　矢吹　政行 ・ ・ 臨時職員　谷山　雅彦 総社市埋蔵文化財学習の館 館　　長　平井　典子 臨時職員　田中　富子（整理担当） 臨時職員　犬飼　眞弓（整理担当）
報告書抄録	副書名　確認調査報告書	副書名　墳丘確認調査報告書

序

総社市街地から西へ向かってひた走り，高梁川に架かる総社大橋を渡ってすぐ北側の秦地域には，昔の風を感じる多くの歴史遺産が集まっています。立派な石棺や渡来系副葬品をもつ金子石塔塚古墳，中四国で最古の寺院跡である秦原廃寺，由緒正しき式内社として延喜式にその名が挙がる石畳神社などがその代表的なものです。今回報告する茶臼嶽古墳も当地域内にあり，東側眼下に高梁川の水面を臨む，眺望に優れた丘陵尾根頂部に立地しています。

茶臼嶽古墳の築かれた丘陵では，平成21年度に始まった治山事業に伴い，数多くの古墳が新たに発見されました。それらは一丁坑古墳群と名付けられ，幅広い時期にわたって築かれ，多様な性格を備えていることがわかってきました。上述の歴史的環境に加え，一丁坑古墳群が発見されたことが契機となり，秦地域では歴史遺産を活用した「地域おこし」の機運が高まりました。そして，地元の方々によって，大小さまざまな活動が精力的に行われる中，茶臼嶽古墳が新たに発見されました。

茶臼嶽古墳が，一丁坑1号墳と同じく大型の前方後方墳であることがわかったため，古墳の基礎的な情報を得る目的で，総社市教育委員会が確認調査を行いました。その結果，古墳の詳細な規模や，造られた時期，墳丘の構造などが明らかになりました。本報告は，その調査成果をまとめたもので，今後の文化財の保護活用，地域の歴史研究の一助となれば幸いです。

最後になりましたが，調査にあたって岡山県教育委員会の方々，岡山大学の新納泉先生には，多大な御指導を賜りました。また，調査に参加していただいた皆様，地元の秦歴史遺産保存協議会の皆様には，温かい御協力をいただきました。記して深謝申し上げます。

平成28年3月

総社市教育委員会

教育長　山　中　榮　輔

例　言

1．本書は，平成27年度に総社市教育委員会が実施した茶臼嶽古墳確認調査の報告書である。

2．調査は，総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもとに実施した。

3．確認調査は，平成27年4月6日から平成27年7月9日の期間で実施した。調査面積は約59㎡である。

整理作業，報告書作成作業は，平成27年度に実施した。

4．確認調査は，総社市教育委員会文化課主査　高橋進一・主事　村田　晋が担当して行った。調査作業員は以下のとおりである。

石井　榮，板野しのぶ，板野浩子，糸島雅春，糸島三枝子，川端清治，佐伯浩子，登森晶子，橋本郁男，林　教安（五十音順）

5．整理作業は高橋，村田が担当して行い，整理作業員は以下のとおりである。

総社市埋蔵文化財学習の館　犬飼真弓，田中富子

6．本書の執筆・編集は村田が担当した。

7．調査で出土した遺物，発掘調査および整理作業において作成した遺構・遺物の実測図や写真等の記録類は，総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）にて保管している。

8．調査及び本書の刊行にあたり，岡山県文化財保護審議会委員　稲田孝司氏のほか，亀田修一氏，正岡睦夫氏をはじめとする総社市文化財保護審議会委員の先生方，岡山大学大学院教授　新納　泉氏，古代吉備文化財センター所長　宇垣匡雅氏に多くの御指導・御助言をいただいた。

また，次の方々に現地で御指導・御助言をいただいた。記して深謝いたします。

岩﨑志保，岩本　崇，梅本康広，大久保徹也，岡田　博，小郷利幸，亀山行雄，河合　忍，寒川史也，岸本直文，草原孝典，久住猛雄，栗林誠治，河本　清，澤田秀実，柴田昌児，清家　章，高畑知功，野崎貴博，野島　永，広瀬和雄，冨加美泰彦，福永伸哉，藤井翔平，松木武彦，松本和男，松山智弘，光本　順，南健太郎，宮岡昌宣，宮里　修，森本直人，安川　満，山口雄治，山本悦世，岡山大学考古学研究室，岡山大学埋蔵文化財調査研究センター，広島大学考古学研究室

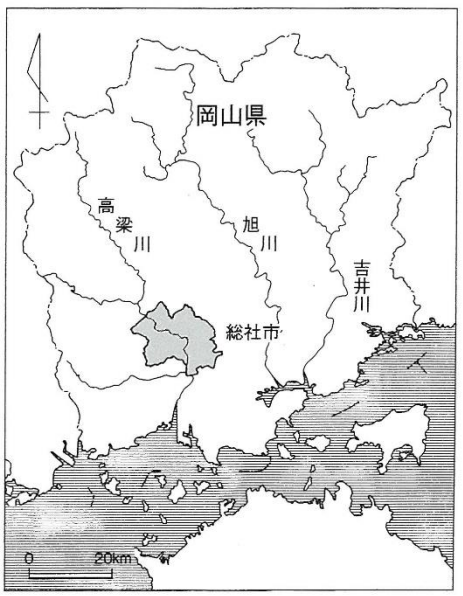
（五十音順，敬称略）

凡　例

1．挿図の複製・一部加筆は，総社市発行の都市計画地図25,000分の1地形図を基に作成している。

2．トレンチ番号は調査時のものを使用している。

3．本書の標高値は海抜高であり，遺構実測図の方位は世界測地系による座標北である。



総社市位置図

1　前方部（Ｔ－１）葺石検出状況（東から）

2　後方部（Ｔ－５）葺石検出状況（南東から）

目　　次

序文
例言・凡例
目次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査にいたる経緯 …… 1
第２節　調査の体制 …… 1
第３節　調査の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4

第３章　調査の概要 …… 7
第１節　測量調査の概要 …… 7
第２節　確認調査の概要 …… 11

第４章　出土遺物 …… 18
第１節　遺物の概要 …… 18
第２節　土器の製作時期について …… 21

第５章　総括 …… 25
第１節　墳丘形態について …… 25
第２節　秦地域における二大前方後方墳の評価 …… 28

図　目　次

第１図　現地に立つ石柱…… 1
第２図　現地説明会の様子…… 2
第３図　茶臼嶽古墳・一丁坑古墳群分布図
（Ｓ＝1/5,000）…… 3
第４図　周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝1/40,000）…… 5
第５図　茶臼嶽古墳地形測量図（Ｓ＝1/400）…… 8
第６図　茶臼嶽古墳墳丘断面図（Ｓ＝1/400）…… 9
第７図　茶臼嶽古墳調査トレンチ配置図
（Ｓ＝1/400）…… 10
第８図　Ｔ－１実測図（Ｓ＝1/60）…… 11
第９図　Ｔ－２実測図（Ｓ＝1/60）…… 12
第10図　Ｔ－３実測図（Ｓ＝1/60）…… 13
第11図　Ｔ－４実測図（Ｓ＝1/60）…… 14
第12図　Ｔ－５実測図（Ｓ＝1/60）…… 15
第13図　Ｔ－６実測図（Ｓ＝1/60）…… 16
第14図　Ｔ－７実測図（Ｓ＝1/60）…… 17
第15図　茶臼嶽古墳出土土器①（Ｓ＝1/3）…… 19
第16図　土器１口縁部下端…… 20
第17図　土器５口縁部下端…… 20
第18図　土器６口縁部下端…… 20
第19図　土器２底部焼成前穿孔…… 20
第20図　土器３底部焼成前穿孔…… 20
第21図　土器６底部焼成前穿孔…… 20
第22図　土器８底部焼成前穿孔…… 20
第23図　茶臼嶽古墳出土土器②（Ｓ＝1/3）…… 21
第24図　「畿内系」二重口縁壺の基本型式…… 22
第25図　茶臼山型式の比較…… 22
第26図　二重口縁壺の類例（Ｓ＝1/4）…… 23
第27図　茶臼嶽古墳墳丘復元案（Ｓ＝1/400）…… 26
第28図　前方後方墳の諸例（Ｓ＝1/800）…… 27
第29図　岡山県前方後方墳分布図
（Ｓ＝1/1,000,000）…… 29

表　目　次

第１表　岡山県前方後方墳一覧…… 28
第２表　遺物一覧…… 31

巻頭図版目次

巻頭図版
１　前方部（Ｔ－１）葺石検出状況（東から）
２　後方部（Ｔ－５）葺石検出状況（南東から）

図　版　目　次

図版１　１　古墳遠景（南東から）……32
　　２　古墳近景（南東から）
　　３　古墳近景（前方部から後方部）
図版２　１　古墳近景（後方部から前方部）……33
　　２　後方部墳頂盗掘坑（南から）
　　３　Ｔ－１近景（南東から）
図版３　１　Ｔ－１墳端溝検出状況（北から）……34
　　２　Ｔ－１北壁墳端付近（南から）
　　３　Ｔ－２近景（南から）
図版４　１　Ｔ－２断ち割り状況（南東から）……35
　　２　Ｔ－２西壁墳端付近（東から）
　　３　Ｔ－３近景（南東から）
図版５　１　Ｔ－３西壁落込み付近（東から）……36
　　２　Ｔ－４近景（東から）
　　３　Ｔ－４岩盤検出状況（南東から）
図版６　１　Ｔ－４南壁（北から）……37
　　２　Ｔ－４南壁落込み付近（北から）
　　３　Ｔ－５近景（南から）
図版７　１　Ｔ－５西壁墳端付近（東から）……38
　　２　Ｔ－５土器出土状況（南から）
　　３　Ｔ－６近景（西から）
図版８　１　Ｔ－６葺石検出状況（西から）……39
　　２　Ｔ－６断ち割り状況（南西から）
　　３　Ｔ－６北壁墳端付近（南から）
図版９　１　Ｔ－７近景（北から）……40
　　２　Ｔ－７断ち割り状況（北東から）
　　３　Ｔ－７西壁墳端付近（東から）
図版10　１　各トレンチ出土土器①　……41
　　２　各トレンチ出土土器②
　　３　各トレンチ出土土器③

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査にいたる経緯

茶臼嶽古墳は，総社市秦に所在している。茶臼嶽古墳周辺の丘陵では，平成21年度に開始した治山事業を契機として，総勢33基となる一丁坑古墳群が新たに発見された。

４世紀前半に築造された全長70ｍ（前方後方墳として県内２番目の規模）の一丁坑１号墳など，特徴的な古墳を含む古墳群の発見により，地元秦地区では歴史遺産を用いた「地域おこし」活動の機運が高まり，平成24年６月には，「秦歴史遺産保存協議会」が発足した。

このような中，同協議会員でもある地元住民の登森康郎氏が山を散策中に，調査地付近に立つ「茶臼嶽」の石柱と地形を見て，同地に古墳がある可能性を考え，平成25年度中に総社市教育委員会に情報を提供した。これを受け，平成26年９月１日から総社市教育委員会が同地の立木伐開を開始したところ，葺石と思われる石材が露出しているのが見つかり，地形観察とあわせて新規の古墳と判断した。遺跡名は，発見の原因となった石柱に記された名前から「茶臼嶽古墳」とした。その後は，古墳の地形測量調査に移行し，平成27年１月29日に終了した。

第１図　現地に立つ石柱

測量調査の結果，茶臼嶽古墳が墳長約65ｍの大型前方後方墳であることが判明した。そのため，地元要望と遺跡の重要性を考慮し，将来的な史跡指定も視野に入れて，古墳の基礎情報を得るための確認調査を実施することとなった。最終的に県指定史跡を目標とし，岡山県教育委員会と協議を行いながら調査の計画と準備を進め，平成27年４月６日から確認調査を開始した。

なお，調査と並行して県指定申請した一丁坑１号墳については，平成28年２月５日付けで県指定史跡となった（指定名称は一丁坑古墳）。

第２節　調査の体制

確認調査は，古墳の県指定史跡も視野に入れていたため，総社市教育委員会が岡山県教育委員会の指導・助言のもと実施することとなった。調査は平成27年４月６日から同27年７月９日にかけて，文化課主査　高橋進一，同主事　村田　晋が担当して行い，調査終了後は整理作業に移行した。

調査地が民地内にあったこともあり，地元自治会をはじめとする地元の方々からは，多大な御支援・御協力をいただいた。また，登森康郎氏から情報をご提供頂いたことにより，重要な古墳の発見につながった。記して厚く感謝申し上げます。

調査組織（平成 26 年度）

総社市教育委員会

教 育 長		山中　榮輔
教育次長		矢吹　政行
参　　与		三村　和久
文化課長		谷山　雅彦
課長補佐	兼　係長	
		平田　壮太郎（調整担当）
主　　査		前角　和夫
主　　査		高橋　進一（調査担当）
主　　任		笹田　健一
主　　任		村間　紀子（庶務担当）
主　　事		村田　晋
臨時職員		田中　富子（整理担当）
臨時職員		犬飼　眞弓（整理担当）

総社市埋蔵文化財学習の館

館　　長	平井　典子

調査組織（平成 27 年度）

総社市教育委員会

教 育 長		山中　榮輔
教育次長		矢吹　政行
参　　与		三村　和久
文化課長		尾崎　啓一
課長補佐	兼　係長	
		平田　壮太郎（調整担当）
主　　査		前角　和夫
主　　査		高橋　進一（調査担当）
主　　任		笹田　健一
主　　任		村間　紀子（庶務担当）
主　　事		村田　晋　（調査担当）
臨時職員		谷山　雅彦
臨時職員		田中　富子（整理担当）
臨時職員		犬飼　眞弓（整理担当）

総社市埋蔵文化財学習の館

館　　長	平井　典子

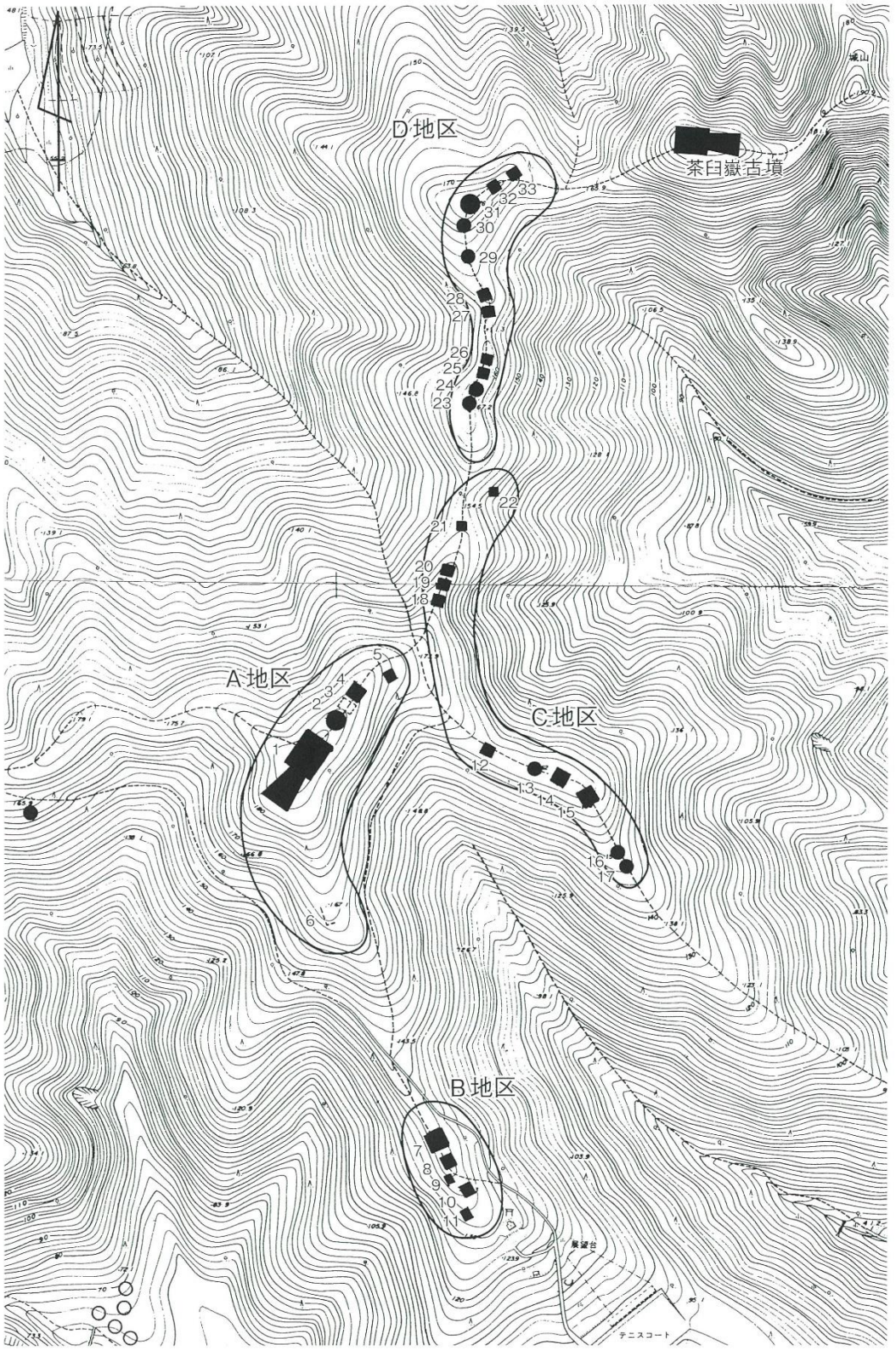
第３節　調査の経過

確認調査は，平成 27 年４月６日から開始し，人力により順次掘り下げを行った。Ｔ－１，Ｔ－５では比較的葺石の遺存状況が良く，浮遊した石材を記録・除去しながら墳端を検討した。その他のトレンチでは平面だけでは判断が難しかったため，断ち割りによる土層の観察も行いながら墳端を検討した。調査が進展し，墳丘規模や築造時期が判ってきたため，同年５月 24 日，現地説明会を実施して調査成果を中間報告し，198 名の参加を得た。その後も，各トレンチの掘り下げや写真記録，実測図作成などを続け，同年７月８日に埋め戻しを開始した。埋め戻しには，掘削により生じた排土をそのまま用いた。急斜面となる部分については土の流出を防ぐため，土嚢袋による簡易な土留めを設けながら行い，同年７月９日作業を完了し，現場を撤収した。

第２図　現地説明会の様子

参考文献

谷山雅彦・高橋進一・村田　晋編『一丁坊古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23　総社市教育委員会　2014 年



第３図　茶臼嶽古墳・一丁坑古墳群分布図（S＝1/5,000）
谷山・高橋・村田編 2014 に一部加筆修正

第２章　遺跡の位置と環境

今回調査対象となった茶臼嶽古墳は高梁川西岸の総社市秦に所在し，正木山から東に派生する丘陵の尾根頂部，標高190ｍ付近に立地する。総社市は岡山県南西部に位置し，市域の中央を北から南に一級河川高梁川が貫流している。市域の北側から西側にかけての大部分は吉備高原の南縁にあたる急峻な山塊となっており，茶臼嶽古墳の立地する丘陵を含め，大半は白亜紀の花崗岩とその風化土である「マサ」からなっている。平野部としては，市域南東部の総社平野と高梁川の一次支流である新本川流域を除いては，蛇行する河川の堆積作用によって作られた小規模な平地が分散するのみである。

縄文時代以前

総社市内における人々の生活痕跡は，旧石器時代の浅尾遺跡，宝福寺裏山遺跡，縄文時代前半期の長良山遺跡，ケンギョウ田遺跡などで早い段階からみられるが，散発的なものである。総社市域において人口増加が窺えるのは，縄文時代後期以降であり，籾痕土器が出土した南溝手遺跡のほか，三輪遺跡群などが遺跡の例として挙げられる。茶臼嶽古墳の位置する秦地域を含む新本川流域で最も古い遺跡は，縄文時代早期の無節縄文土器が出土した長瀞遺跡である。

弥生時代

続く弥生時代に入ると，新本川流域でも比較的規模の大きな集落が営まれるようになる。高梁川西岸の上原遺跡では，弥生時代前期から古墳時代前期までの遺構が検出され，弥生時代前期の溝からは，祭祀に用いたと考えられる人面土製品が出土している。また，有安遺跡で弥生時代中期の住居跡と段状遺構が，横寺遺跡で弥生時代中期から古墳時代初頭の住居跡群が，坊ヶ内遺跡で弥生時代後期の住居跡群がそれぞれ検出されている。特に横寺遺跡では，小銅鐸，家形土製品，絵画土器など特徴的な遺物が多く出土している。集落内での遺構検出数は弥生時代後期に入ると増加するが，弥生時代後期後半には，立坂墳丘墓，伊与部山墳丘墓などの特定集団墓も造営されるようになる。三輪の宮山墳丘墓が弥生時代終末期に現れるように，この時期には各地域の集団内に階層性が生まれていることがわかる。

古墳時代

古墳時代には上原遺跡，横寺遺跡などで引き続き前期まで集落が営まれるほか，高砂遺跡でも前期の住居跡群が確認されており，小砂遺跡では前期・後期の住居跡群・後期の水田跡が，坊ヶ内遺跡では後期の住居跡群が検出されている。とはいえ，新本川流域における古墳時代集落の調査例は，前時代に比べるといまだ少なく，特に古墳時代中期の集落は少ないようで，惣堂遺跡で溝が検出されている程度である。古墳の築造状況をみていくと，前期には割石積みの竪穴式石槨を備えた砂子山４号墳を含む砂子山古墳群，詳細な位置・墳形等は不明ながら，三角縁四神四獣鏡が出土したとされる秦上沼古墳，大型前方後円墳である秦大坑古墳のほか，特殊器台形埴輪の影響を強く残す埴輪が出土した前方後方墳である一丁坑１号墳など，特徴的な大型古墳が多く築かれる。しかし，続く古墳時代中期になると，岡山市北区造山古墳，三須作山古墳，宿寺山古墳といった大型前方後円墳，角力取山古墳，折敷山古墳，赤坂龍塚古墳といった大型方墳など，総社平野の南東部が古墳築造の中心地となり，新本川流域では一丁坑４号墳，金子２号墳など古墳の築造はみられるものの，大型墳が築かれることはない。古墳の築造にあたり規制が生じた結果であろうか。古墳時代後期・終末期に入ると，渡来系遺物が出土した金子石塔塚古墳，久代大塚古墳，槇木林の塚古墳，立坂北古墳群など多くの横穴式石室

1 茶臼嶽古墳	8 秦（原）廃寺	15 宮ノ前遺跡	22 長瀞遺跡
2 一丁坑古墳群	9 荒平山城跡	16 砂子山古墳群	23 西団地内遺跡群
3 金子10号墳（秦大坑）	10 上原遺跡	17 八紘古墳群	24 立坂弥生墳丘墓
4 秦上沼古墳	11 狩谷遺跡・古墳群	18 二反峠古墳	25 久代大塚古墳
5 秦茶臼山古墳	12 砂子遺跡	19 坊ヶ内遺跡	26 伊与部山弥生墳丘墓
6 奥場２号墳（金子石塔塚）	13 鬼ノ身城跡	20 高砂遺跡	27 高丸古城跡
7 長砂２号墳（長砂石棺）	14 法正寺１号墳	21 一倉遺跡	28 塩田遺跡

第４図　周辺主要遺跡分布図（S＝1/40,000）

墳のほか，県内唯一の横口式石棺をもつ長砂２号墳などが築かれる。

古　　代

飛鳥時代には，中国・四国地方で最古の寺院跡である秦原廃寺が建立される。遺跡の全容は不明であるが，出土瓦からみて創建は白鳳期よりも古くなることがわかっており，北側にある天神社境内では付随する瓦窯も確認されている。集落としては，横寺遺跡で７世紀末から９世紀までの建物群，宮ノ前遺跡で８・９世紀の建物群，狩谷遺跡で８・９世紀の建物群と緑釉陶器が確認されている。生産遺跡として特筆されるのが７～８世紀代を前後する時期の沖田奥製鉄遺跡，藤原製鉄遺跡，大ノ奥製鉄遺跡，板井砂奥製鉄遺跡などの大製鉄遺跡群である。時期が重複することから，秦原廃寺造営の経済的基盤として製鉄業を挙げる考えもある。遺跡以外では，新本川上流域から小田川流域のどこかで出土したとされる「矢田部首人足」「宝亀七年定（776年）」の銘入り塼があり，一種の買地券と考えられている。

参考文献

『一丁坑古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 23　総社市教育委員会　2014 年
「上原遺跡発掘調査報告」『総社市埋蔵文化財調査年報』19　総社市教育委員会　2010 年
『総社市史』考古資料編　総社市　1987 年
『総社市埋蔵文化財調査年報』4　総社市教育委員会　1994 年　32 ～ 41 頁
『総社市埋蔵文化財調査年報』5　総社市教育委員会　1995 年　31 ～ 43 頁
『総社市埋蔵文化財調査年報』6　総社市教育委員会　1996 年　63 ～ 67 頁
『総社市埋蔵文化財調査年報』13　総社市教育委員会　2004 年　19 ～ 22 頁
「惣堂遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』2　総社市教育委員会　1993 年
『西団地内遺跡群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告 9　総社市教育委員会　1991 年
「秦（秦原）廃寺確認調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』6　総社市教育委員会　1996 年
「横寺遺跡」『総社市埋蔵文化財調査年報』3　総社市教育委員会　1994 年

第３章　調査の概要

第１節　測量調査の概要

先述のとおり，新規発見した時点で大型の古墳であることが明らかであったため，墳丘に関する基礎データを得る目的で測量調査を行った。開放トラバース法を用い，平板測量によって古墳と周辺の詳細な等高線図を作成した。計測線は縮尺100分の１の精度で方眼紙上に記録した。また，測量調査の際に，標高のわかるプラスチック製永久杭を計15箇所に設置している。

調査地の現況

調査地となった古墳は全体が鬱蒼と茂る山林の中にあった。そのため，立木を伐開するまでは，南側すぐ傍の山道を人が往来していたにも関わらず，長く古墳の存在は認知されていなかった。一丁坑古墳群の発見によって，周囲の丘陵上に古墳が存在することが明らかになったこと，古墳に対する関心が高まったことにより，古墳であることの多い地名としての「茶臼○」に気付き，現地の石柱に注意が向いたことが本古墳の発見に繋がったであろうことは先に述べた。

「茶臼嶽」の名称に関しては『式内社調査報告』第二十二巻，石畳神社の記述中に「…高梁川の淵にそびえる五～六○メートルの石柱をご神體とする…この石柱の西方に連なる山を茶臼嶽と呼んでいる。…」とある（中山1980）。石畳神社とその御神体である磐座は，茶臼嶽古墳の北東方向，大きく曲流する高梁川を北東に臨む立地であるが，上記の文献によれば，古墳の立地する尾根頂部を含めた広い範囲を「茶臼嶽」と呼んでいたようである。

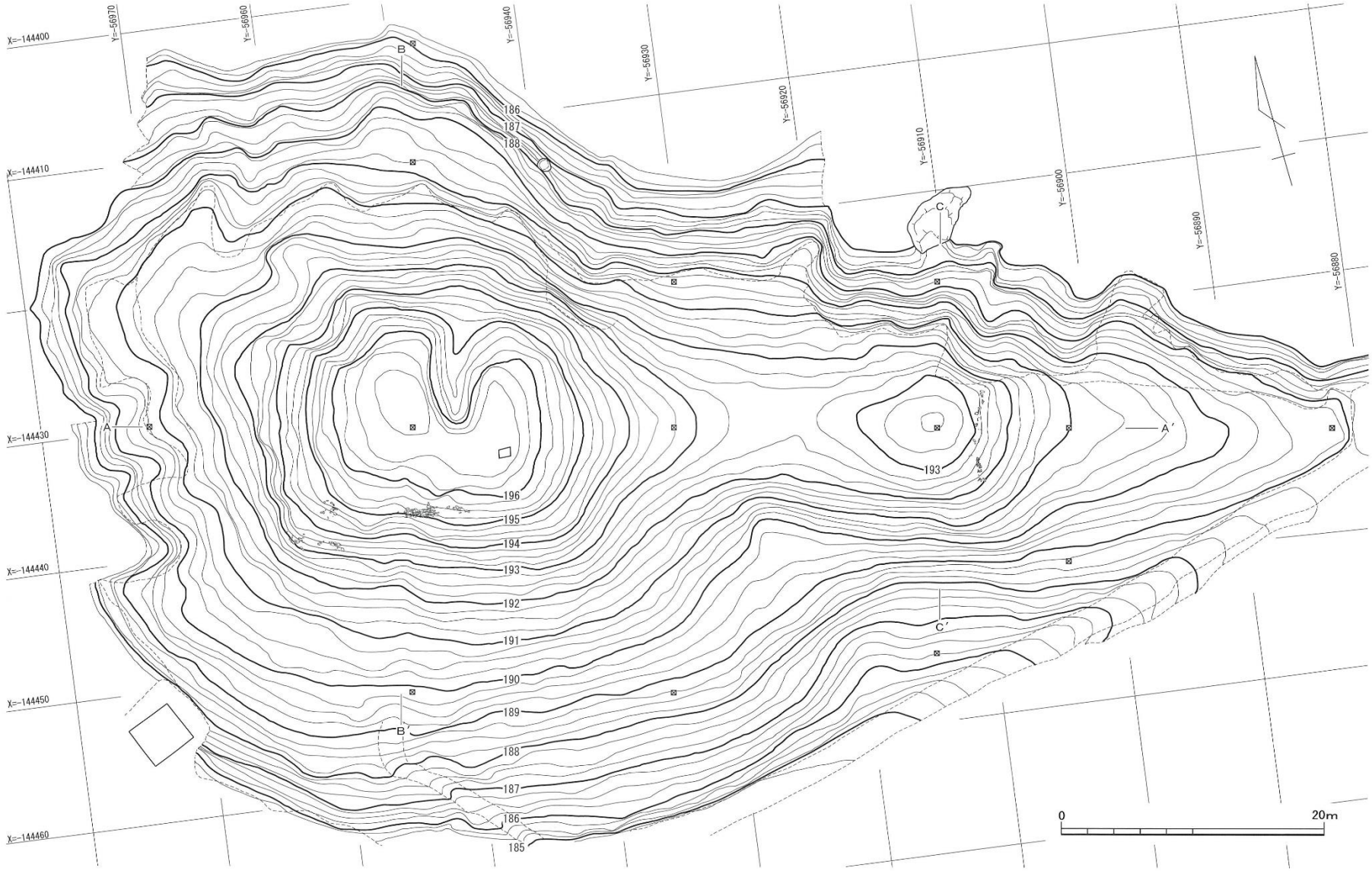
墳丘は西北西－東南東方向に主軸をとり，後方部を西北西に向ける。北側と西側は，人為的な掘削あるいは自然な崩落によって抉れている部分が目立つ。後方部墳頂平坦面の中程から北側に向かっては，横穴上に突き抜けるような大盗掘坑が空いている。ピンポールで探査したが石材等は見つからず，遺物が表採されることもなかった。埋葬施設に石材を用いたか否か，埋葬が１基か２基か，現時点では不明である。また，墳丘の各所で葺石が露出していたが，石材が不揃いな印象を受けることや，埴輪などがまったく採集されないことから，古式古墳である可能性が考えられた。

なお，後方部墳頂上には石鎚大権現を祀った石の祠が建てられており，墳丘北側には土地境の表示と思われる石もみられる。古墳と認知されていたかは不明だが，少なくとも江戸時代前後には墳丘内に人が立ち入っていたようである。

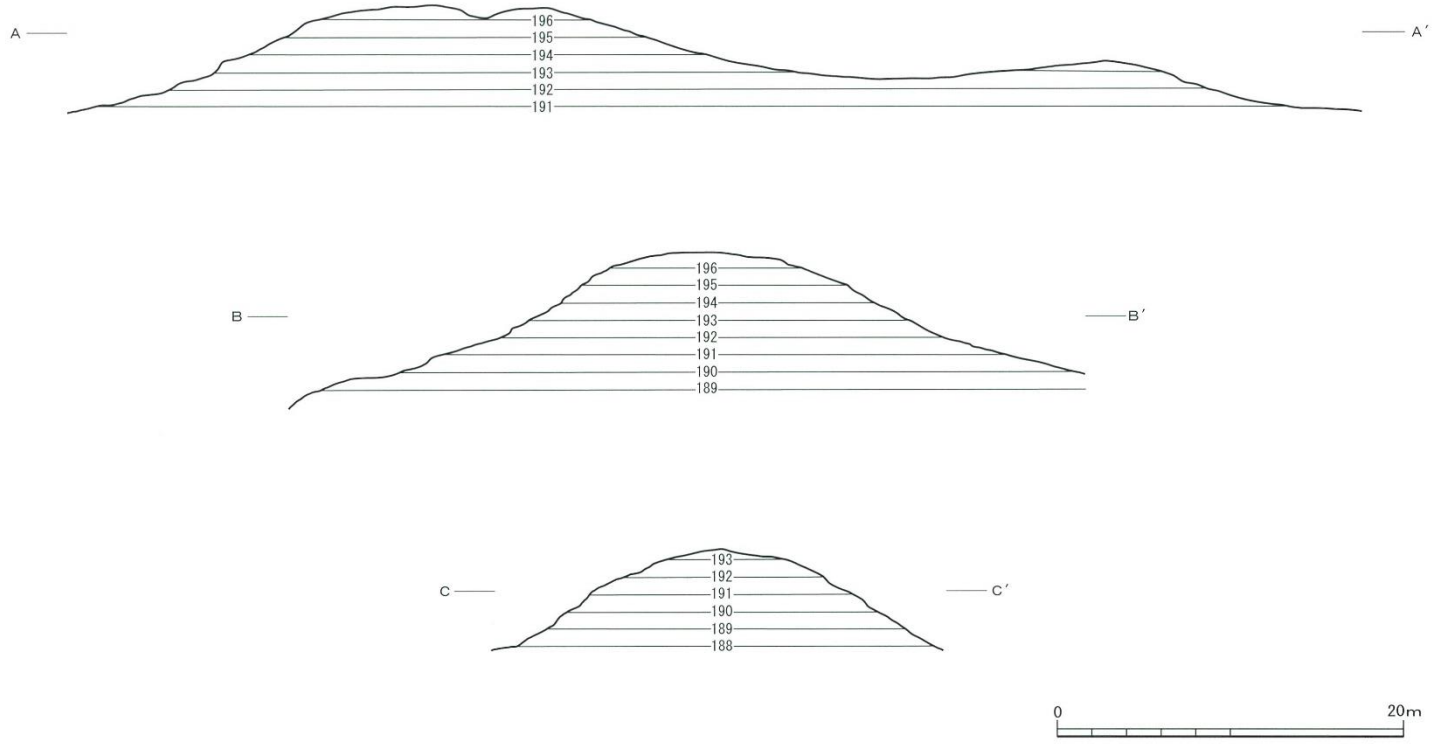
小　　結

測量図の作成によって，発見時の現地観察で想定されたとおり，古墳の墳形が前方後方墳であることが改めて確認できた（第５図）。古墳の北側が急傾斜，南側が緩傾斜となっており，特に後方部の見かけの墳端は傾斜にあわせて南側に長くなっていることが想定された。古墳南側にある見かけのくびれ部付近では，標高190ｍを境に傾斜が緩くなることから，付近が古墳築造時に墳端を成形した結果生じた平坦面である可能性が考えられた。段築は明瞭ではなかったが，墳丘の推定範囲から後方部のみ三段築成となる可能性も残った。

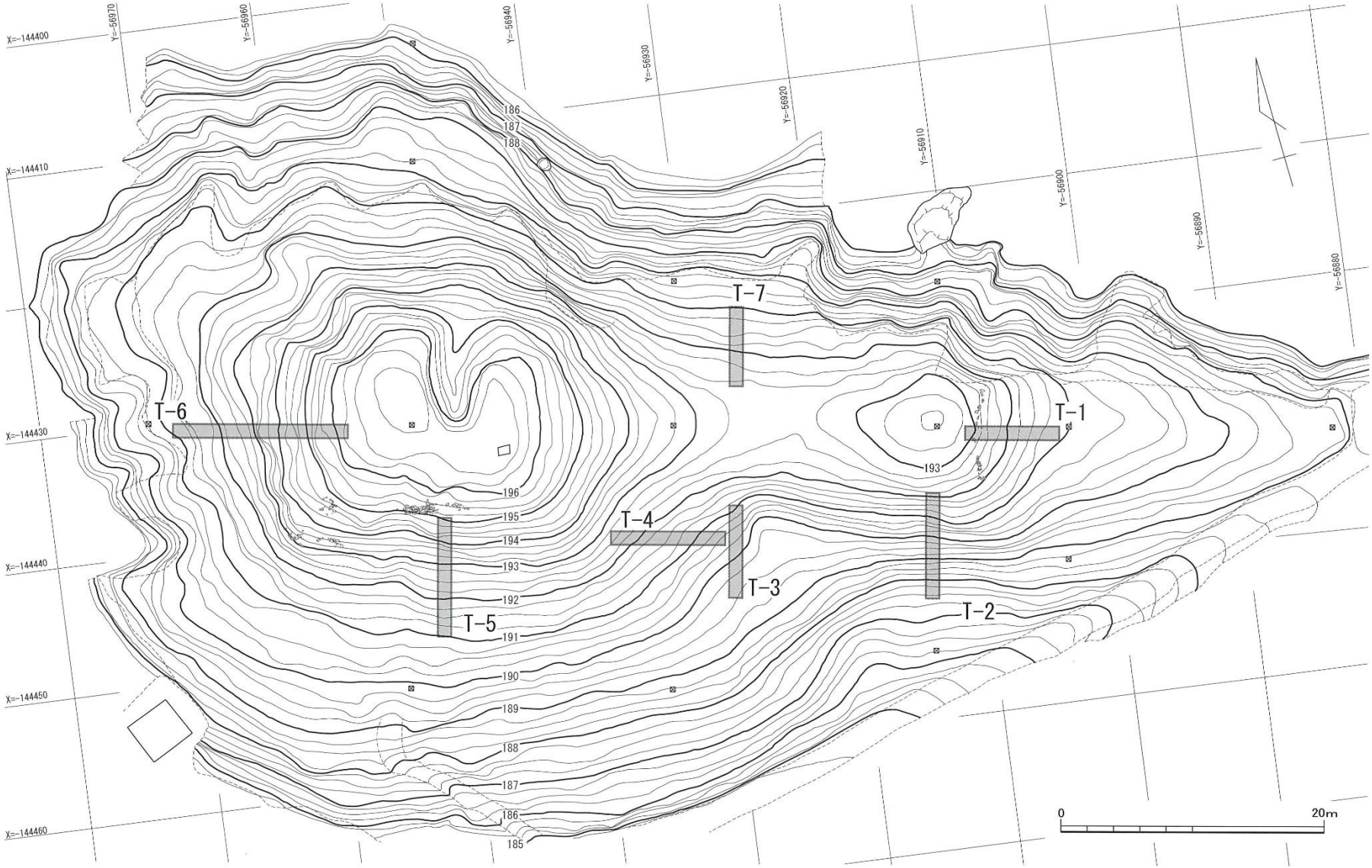
墳丘全長は約65ｍと推定され，長さの比率は後方部：前方部がおおよそ１：１となった。前方部は先端に向かって幅を増す，いわゆる撥形と考えられるが，立地する地形に合わせることを優先している印象であった。墳丘縦断面をみると，約４ｍもの高低差がみられ，低平な前方部に対して後方部



第５図　茶臼嶽古墳地形測量図（S＝1/400）



第６図　茶臼嶽古墳墳丘断面図（S＝1/400）



第７図　茶臼嶽古墳調査トレンチ配置図（S＝1/400）

は高く盛土されていることが想定された（第６図）。前方部の肥大化傾向が窺えないことから，古式古墳の可能性が増す結果となった。

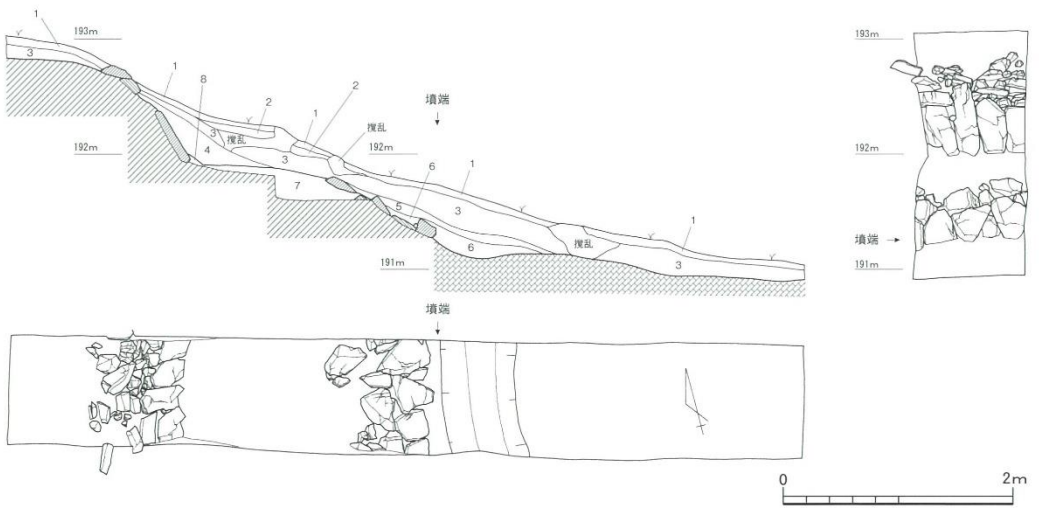
第２節　確認調査の概要

測量調査の結果を踏まえ，①墳端の確認，②墳丘外表施設の確認，③築造時期の特定，を目的として確認調査が行われる運びとなった。調査は遺跡の保護を第一に考え，必要最小限の規模で行う方針であったため，墳端付近を中心に幅１ｍのトレンチを設けて調査する方法をとった。測量図と現地の地形を参考にしながら，仮の墳丘主軸に並行あるいは直交するかたちで，見かけの墳端付近７箇所にトレンチを設け，前方部先端のトレンチから時計回りに番号をつけた（第７図）。調査面積は約 59㎡となった。平面的に判断可能な箇所については墳丘表面で掘削を止め，平面で判断が難しい箇所については，部分的に断ち割りを入れ，断面による墳端検出に努めた。

Ｔ－１（第８図）

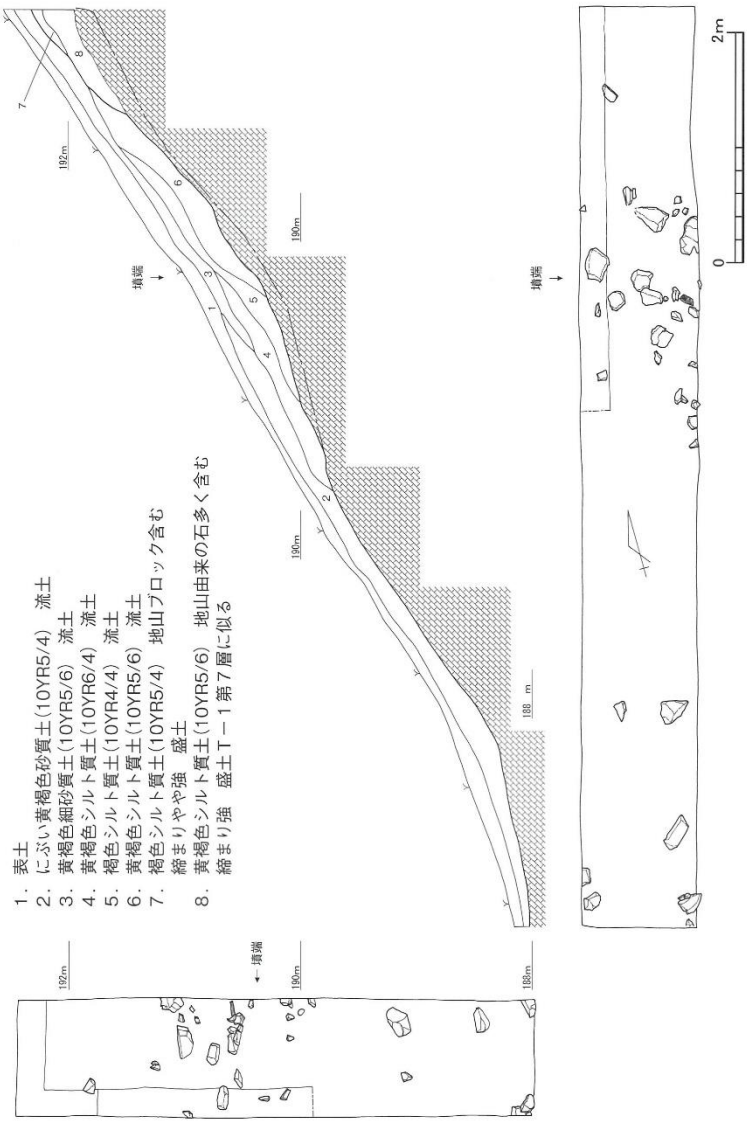
前方部東側の構造と墳端位置を確認するために設定した。Ｔ－１は調査したトレンチの中でも墳丘外側に向かう傾斜が小さく，土砂の流出が少ないためか，墳丘は良好な状態で保存されていた。斜面の葺石もほぼ完全な状態で残存していており，墳端や２段の段築も検出は容易であった。トレンチ西端から 0.9 ｍ付近までを墳頂平坦面，0.9 ～ 1.6 ｍ付近までを２段目墳丘斜面，1.6 ～ 2.8 ｍ付近までを中間テラス，2.8 ～ 3.7 ｍ付近までを１段目墳丘斜面と考える。トレンチ西端から 3.7 ｍ付近が墳端となる。

特筆すべき点として，葺石石材は角ばった石が主体であり，２段目の斜面では長大な石を縦位置で急角度に据えて，その上に小型の割石を積み上げている状況が確認された。石材の大きさも比較的ば



１．表土
２．にぶい黄橙色シルト質土(10YR7/4)　流土
３．黄褐色細砂質土(10YR5/6)　流土
４．黄褐色(10YR5/6)～にぶい黄褐色(10YR5/4)細砂質土　浮遊葺石含む　流土
５．にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4)　締まり弱　流土
６．明黄褐色細砂質土(10YR6/6)　浮遊葺石含む　締まり弱　流土
７．明黄褐色シルト質土(10YR6/6)　地山由来の石多く含む　締まり強　盛土
８．褐色シルト質土(10YR4/4)　締まり強　葺石を固定する置き土

第８図　Ｔ－１実測図（Ｓ＝ 1/60）



第9図　T－2実測図（S＝1/60）

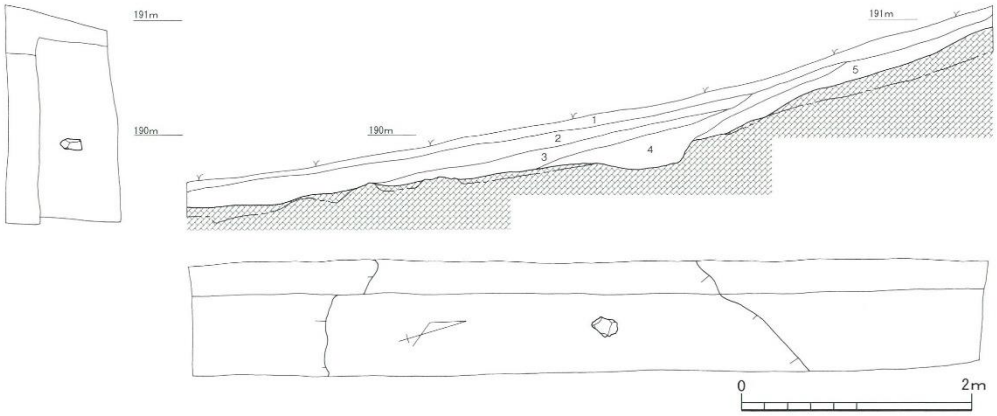
らつきが少なく，積み方についても規則性が窺われた。また，急角度に石を据えるにあたり，締まりの強い置き土で固定したこともわかった。葺石の石材については，地山に含まれる山石を用いており，後述のT－5・T－6においても同様と考えられる。1段目葺石の外側には地山を加工した溝状の落込みも検出した。尾根筋に直交するように溝を入れ，墳丘と周辺を区画したものと捉えている。

T－2（第9図）

前方部南側の状況を確認するために設定した。墳丘斜面が急なためか，葺石はすべて滑り落ちたと判断され，現位置を保っているとみなせるものはなかった。平面で墳端位置を決めることが難しかったため，トレンチ北部分を浅く断ち割り，壁面観察を行った。盛土は上方の一部に確認できるのみで，葺石とともに滑り落ちたものと判断され，段築やテラスも検出できなかった。トレンチ北端から2.3 m付近の位置に，上方から続く傾斜の大局的な終点となる地山の傾斜変換を見出すことができた。ここを境として2 m程平坦面が下方に続くことから，墳端と判断した。

T－3（第10図）

くびれ部の墳端を確認するために設定した。調査前に地形観察で見出された見かけの墳端付近にトレンチを設けた。結果，トレンチ北端から2.6 m付近の位置に，見かけの墳端と対応するように地山を削りこんだ落込みを検出した。検出当初はこれを墳端と考えたが，後述するように，後にこれは後世に改変を受けたものである可能性が高いと判断された。結果としてT－3内で墳端を確認することはできなかった。翻ると，これによって墳端はトレンチのさらに北側（上方）にあることがわかった



1．表土
2．明黄褐色シルト質土(10YR6/6)　細砂含む 落込み流入土　Ｔ－４第２層に相当
3．にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4)　落込み流入土　Ｔ－４第３層に相当
4．にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/4)　締まり弱　鉄分わずかに含む　落込み流入土　Ｔ－４第４層に相当
5．黄橙色細砂質土(10YR7/8)　鉄分わずかに含む　流土

第10図　Ｔ－３実測図（Ｓ＝1/60）

といえる。

Ｔ－４（第11図）

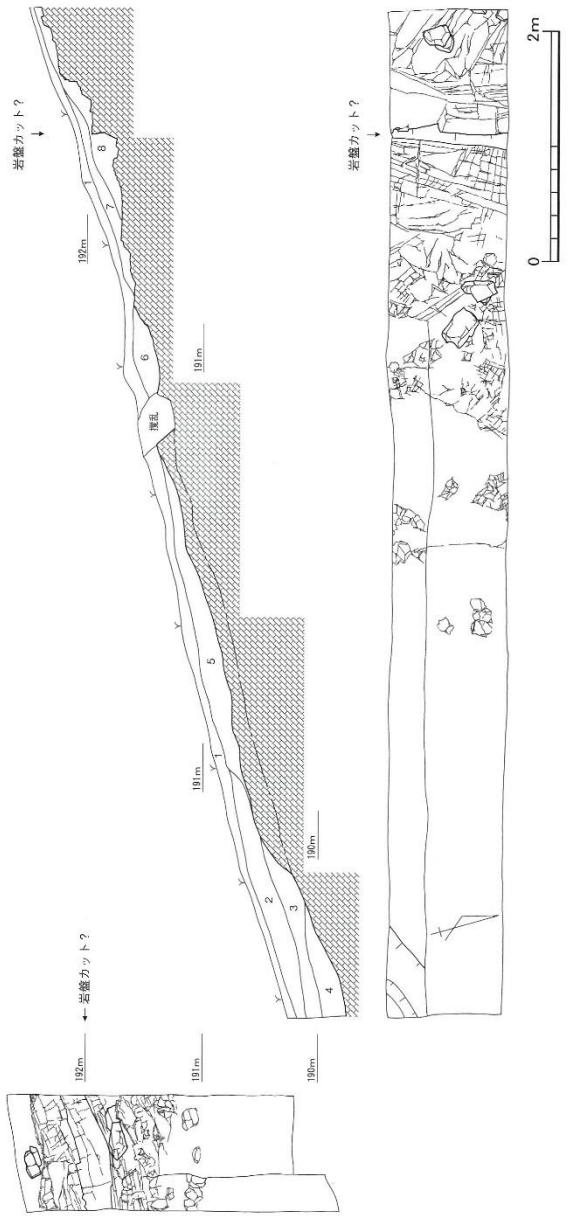
くびれ部の墳端を確認するため，Ｔ－３で検出された落込みと直交するかたちで設定し，両トレンチ内の状況を比較しながら調査を進めた。結果，トレンチ東側でＴ－３内で検出したものに連続すると考えられる，落込みを検出した。この落込みは，埋土中に遺物は含まなかったが，古墳時代遺物を含む流土層と地山層を切り込んでいたことから，古墳の築造以降のものであると考えられた。よって，Ｔ－３で検出した落込みも古墳の墳端と考えることはできず，後世の改変によるものと判断された。

トレンチ西側は岩盤となり，岩盤直上では古墳に伴う土器片や，上方から転落したと考えられる葺石が検出された。トレンチ西端から1.1ｍ付近では，この岩盤が揃った面をもつ，あたかもカットされたような状況で検出された。この推定カット面の直上から土器片が出土したことから，古墳築造時にはこのカット面が存在した可能性が高く，築造にあたり周辺の岩盤を加工したことが想定される。カット付近の流土から割れた石が一つも検出されていない状況は，自然に岩盤が割れた場合では想定しにくい。やはり加工時に除去されたと考えたい。

当初Ｔ－３で検出した落込みを墳端と誤認したことにより，トレンチを本来の墳端より下方に設定する結果となり，本来の墳端をトレンチ内で確認することができなかった。あえて成果を述べるならば，本来の墳端がトレンチのさらに西側（上方）にあることがわかった。

Ｔ－５（第12図）

後方部南側の構造と墳端を確認するために設定した。結果，斜面の葺石やテラス面が比較的良好に残存していることがわかった。墳丘１段目の葺石は崩れていたが，トレンチ北端から4.1ｍ付近で地山を削りだした明瞭な傾斜変換が認められ，崩れた葺石石材や転落土器片が溜まっていたため，ここを墳端と判断した。墳端の南側は風化岩盤の層が広がっており，墳丘範囲内と考えることは難しかった。測量調査直後には，後方部３段築成の可能性も考えていたが，墳丘自体は２段築成と判断した。ただし，墳丘南側に後方部の平面形と対応するかのように等高線がめぐっている事実と，Ｔ－４西側



1．表土
2．明黄褐色シルト質土(10YR6/6)　細砂含む 落込み流入土　T－3第2層に相当
3．にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4)　落込み流入土　T－3第3層に相当
4．にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/4)　締まり弱　落込み流入土
　T－3第4層に相当
5．明黄褐色シルト質土(2.5Y6/6)　流土
6．黄褐色シルト質土(10YR5/6)　土器片含む　流土
7．褐色シルト質土(10YR4/6)　締まり強　土器片含む　流土
8．褐色シルト質土(7.5YR4/4)　締まり強　土器片多く含む　流土

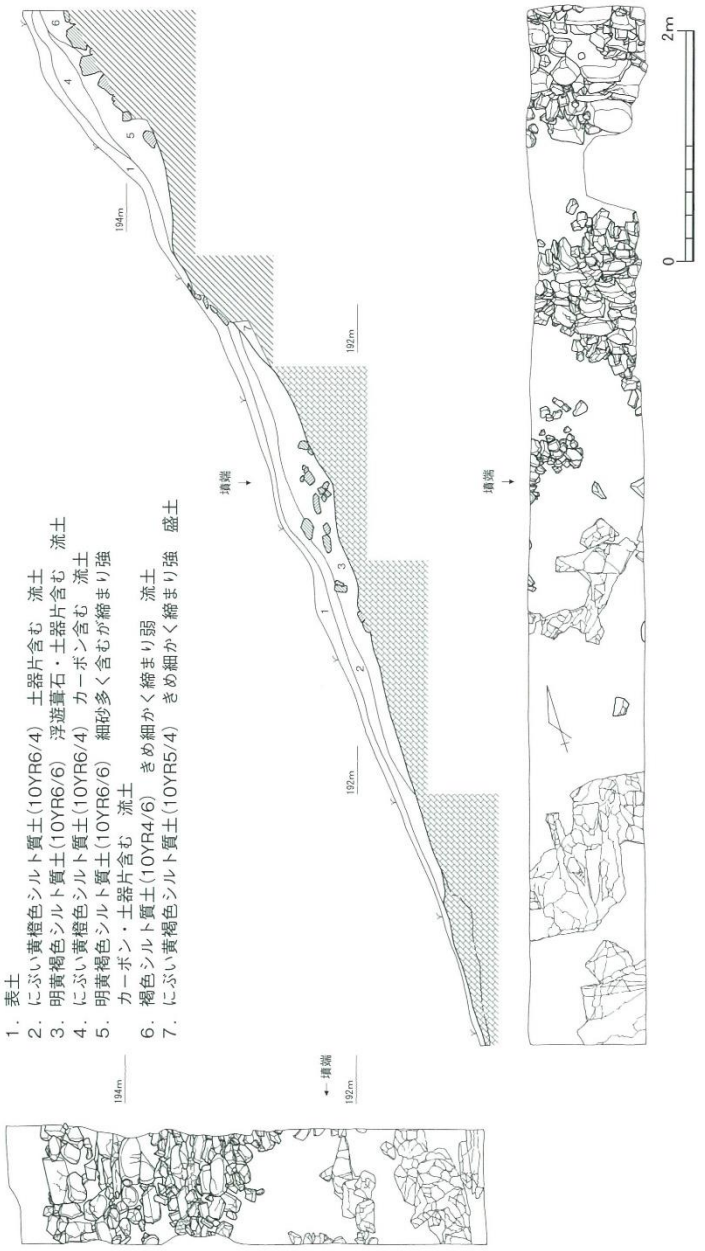
第11図　T－4実測図（S＝1/60）

でみられた推定加工岩盤の存在も考慮すれば，段築とまではいかないまでも，墳丘南側一帯が築造時に整形された可能性は十分考えられよう。

トレンチ内について述べれば，葺石の検出状況と土層観察等から，トレンチ北端から1.2ｍ付近までを２段目墳丘斜面，1.2～2.0ｍ付近までを中間テラス，2.0～4.1ｍ付近までを１段目墳丘斜面と考えられる。２段目墳丘斜面はトレンチ内に収まっていないため，地形からの推定となるが，T－５北側延伸上２ｍ程の位置が墳頂平坦面との境となりそうである。前方部先端とは違い，傾斜に合わせて斜面幅が広くなっている状況といえる。１段目斜面，２段目斜面とも40°前後の傾斜をもち，２段目斜面の方が長くなりそうである。葺石の積み方も前方部とは違い，不揃いな角石を横位置で積み上げて用いている状況が確認できた。

T－6（第13図）

後方部西側の構造と墳端を確認するために設定した。斜面の葺石については２段にわたって検出した。トレンチ東端から5.0ｍ付近では，T－１でみられたような長大な石を据えている状況が確認され，ここを墳端と捉えることにした。トレンチ西端から5.2ｍ付近にも，墳端を示す可能性がある傾斜変換点があったが，この周辺は表土が薄く，流土の質もトレンチ上方とは変化するため，地形の観察と合わせて，改変を受けていると判断するに至った。T－５の墳端とレベル的には整合的であり，当初は墳端かとも思われたが，積極的にそう判断することは難しそうである。後方部西側では，後述する



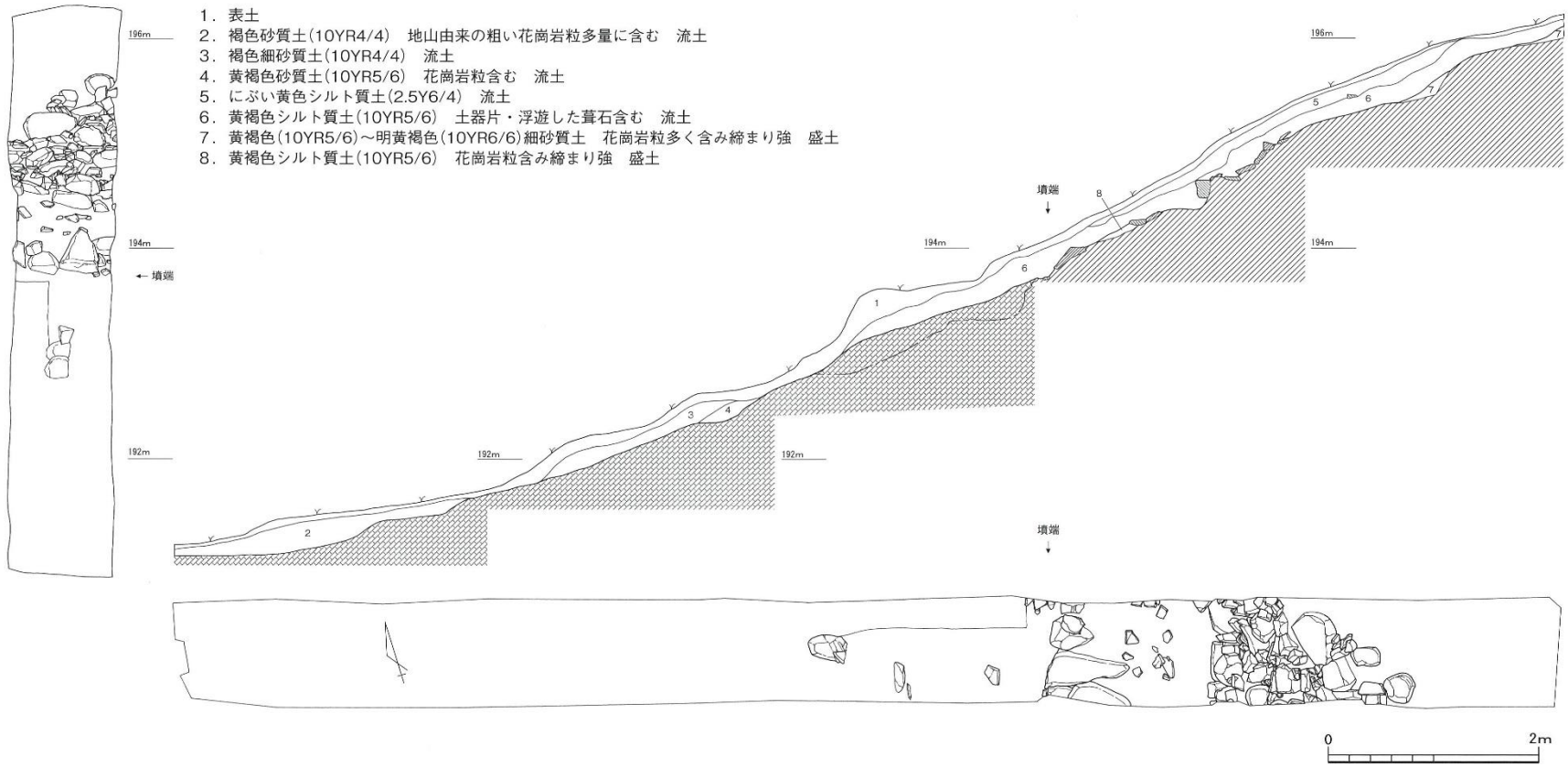
第12図 T－5実測図（S＝1/60）

T－7での状況のように，地形に合わせて墳端のレベルが比較的上方へと上がっているのであろう。

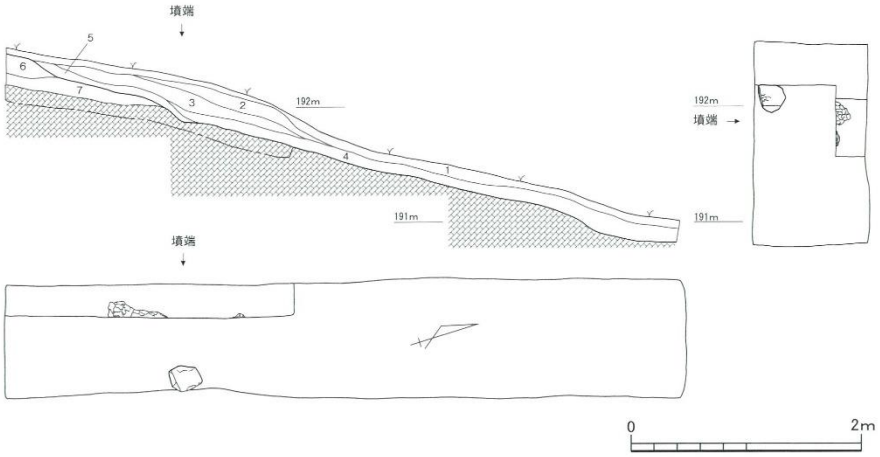
葺石の検出状況と土層観察から，トレンチ東端から1.0 m付近までを墳頂平坦面，1.0 m～3.3 m付近までを2段目墳丘斜面，3.3 m～4.1 m付近までを中間テラス，4.1～5.0 m付近を1段目墳丘斜面と判断している。墳丘の1段目は30°前後，2段目は40°前後となる傾斜が復元でき，2段目の立ち上がり度合いが大きくなっており，墳丘斜面長も2段目が長い。葺石には，大小の不整形な石材が不規則に使われ，根石となるような大きな石が斜面の途中に組み込まれているなど，整然としているとは言い難い状況であった。

T－7（第14図）

前方部北側の構造と墳端を確認するために設定した。調査前に葺石が露出していた近隣を狙ってトレンチを設定したが，調査箇所では葺石は検出されなかった。平面的に墳端を検出することが困難だったため，トレンチ南部分を浅く断ち割り，壁面観察を行った。結果，トレンチ南端から1.5 m付近で地山削り出しによる傾斜変換が認められたため，ここを墳端と判断した。また，トレンチ南端から0.4 m付近では，地表にわずかに露出している葺石と対応するようなかたちで盛土の立ち上がりが認められ，そこから北側1 mは平坦な盛土の堆積が続いていた。以上のことから，墳端から現墳頂までの高さは約0.9 mと墳丘は非常に低平ではあるが，前方部北側は，上段，下段とも一列の葺石を用いて低い段を造った2段築成を呈していたと推定される。



第13図　T－6実測図（S＝1/60）



1．表土
2．明黄褐色シルト質土(10YR6/6)　流土
3．にぶい黄橙色シルト質土(10YR6/4)　流土
4．にぶい黄橙色シルト質土(10YR6/6)　砂粒多く含む　流土
5．明黄褐色シルト質土(10YR6/6)　細砂含む　流土
6．明黄褐色シルト質土(10YR7/6)　粗い砂粒多く含む　盛土
7．にぶい黄橙色シルト質土(10YR6/4)　細砂含み締まり強　弥生土器片含む　盛土

第14図　Ｔ－７実測図（Ｓ＝1/60）

小　結

まず，Ｔ－１とＴ－６で検出した墳端同士の距離から，茶臼嶽古墳は測量時に想定されたよりも小さくなり，墳長55.4ｍとなることがわかった。墳丘高についてはＴ－７で0.9ｍ，Ｔ－５で4.0ｍと，地形に合わせて墳丘各部でかなりの高低差がみられ，墳丘全体としては基本的に２段築成であるが，斜面の傾斜に合わせて斜面幅が変わっていることが判明した。墳丘は，地山を削りだすことによって成形され，その土を利用して幾分かの盛土がなされているようである。少なくともトレンチ調査を行った箇所については，旧表土，いわゆるブラックバンドは観察されなかったことから，加工の程度は大きかったと推定される。加えて，Ｔ－４の状況からは，古墳の築造にあたって墳丘周囲についても整形を行った可能性が指摘できる。そして，くびれ部の南側にある傾斜変換については，後世の改変によることが明らかとなった。

さらに特徴的な部分として挙げられることは，やはり葺石である。Ｔ－１・Ｔ－５・Ｔ－６で葺石を検出したが，各トレンチの葺石の大きさ，ばらつきや形状，積み方などから強調されるのは，葺石の据え方における統一感のなさである。古墳の定型化問題という範疇の中で考えることが許されるならば，茶臼嶽古墳の葺石は不定型的であり，古式古墳ならではの特徴と捉えうるものである。確認調査という性格上最小限の掘削にとどめたため詳細は不明であるが，墳丘の平面形が不整であり，墳丘が低いことから盛土量も相当に少ないことが想定される。また，撥形状に開く前方部の墳丘形態も，古式古墳としての特徴を示すものと考えられる。

参考文献

中山　薫「８　石畳神社」『式内社調査報告』第二十二巻　皇學館大學出版部　1980年
谷山雅彦・高橋進一・村田　晋編『一丁坊古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告23　総社市教育委員会　2014年

第４章　出土遺物

遺物として，各トレンチから土器が出土した。総量はコンテナ１箱分で，すべて破片である。元位置を保っていたものはなく，すべて流土中から出土しており，墳丘上方から転落したと考えられるものであった。特に，Ｔ－４とＴ－５から出土した壺の胴部片が接合したことから，少なくとも後方部墳頂では祭祀が行われた可能性は高い。前方部側のＴ－１，Ｔ－２では，出土量は少ないが古墳に伴うと考えられる壺片等が出土した。後方部側ではＴ－５墳端付近からの出土量が最も多く，壺等が出土した。破片量の割に接合するものが少ないが，同一個体の判別によりある程度は図面上で復元することができた。

第１節　遺物の概要

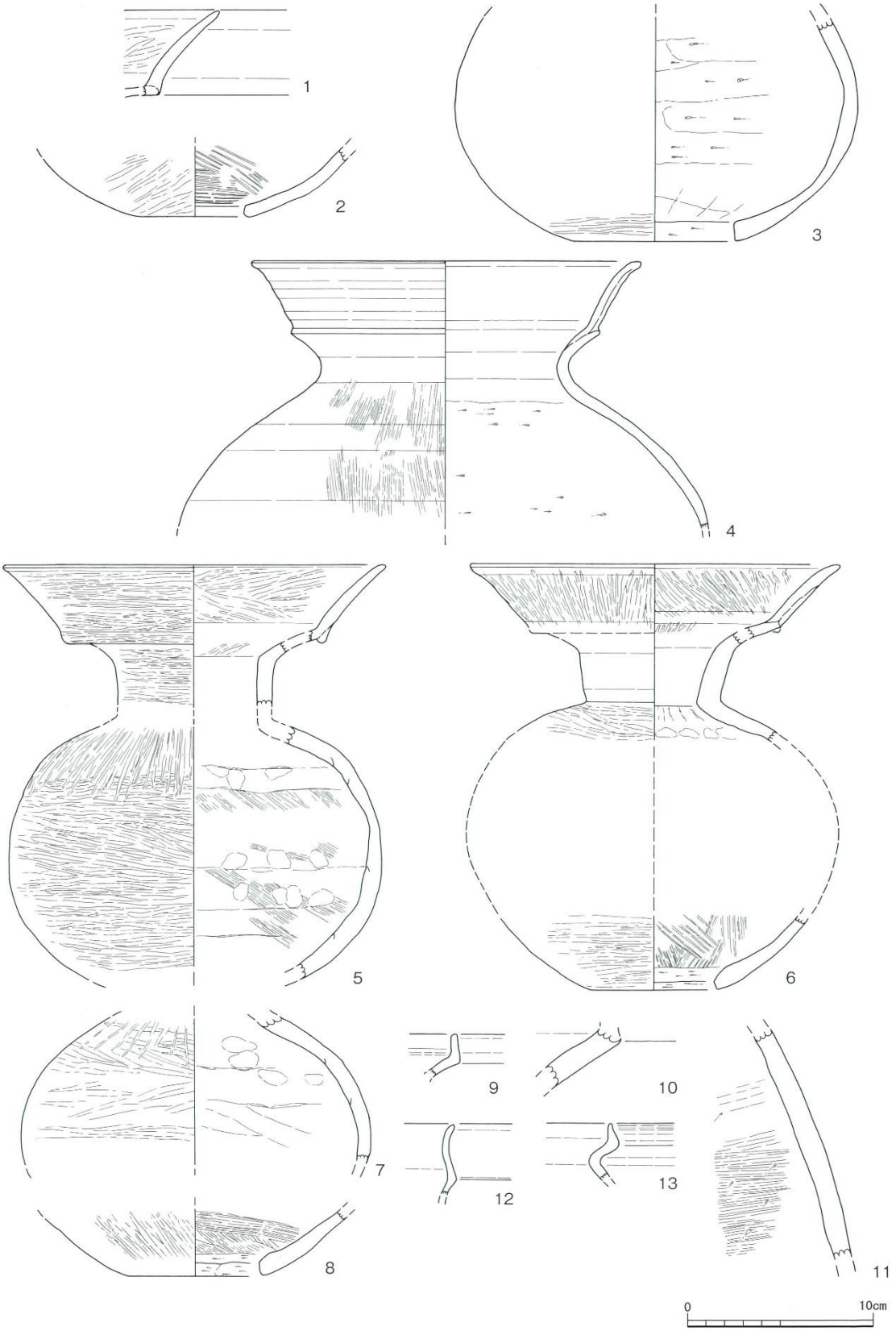
古墳に伴う可能性がある土器（第15図）

１～８は古墳に伴うと考えられる土器である。１・２はＴ－１から出土した。１は二重口縁壺の口縁部である。単位は明瞭でないが，横位のヘラミガキが施されている。下端は拡張せずに仕上げている。２は二重口縁壺の底部である。外面はヘラミガキ，内面は粗いハケによって整えられ，底面に焼成前穿孔がある。

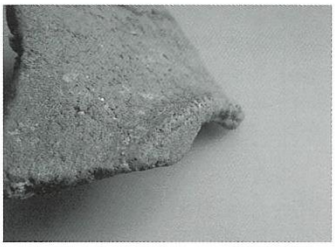
３はＴ－４から出土した二重口縁壺の体部である。やや潰れた球形を呈する。外面は不明瞭だが，底部付近にヘラミガキが観察され，内面は横位のヘラケズリが施される。調整後，底面に焼成前穿孔が施され，端部はヘラ状工具とナデにより整えられる。１～３は外面が橙色味を帯び，表面のややざらついた胎土を用いて製作されている。後述の５～８が，褐色味の強い胎土に赤色顔料を塗彩するものであり，差異が指摘できる。

４～８はＴ－５から出土した。４は壺である。胴部外面は細かいタテハケ後，ナデにより整えられ，内面は横位ヘラケズリが施される。口縁部は内外をヨコナデでならしている。５～８は二重口縁壺である。５は底部以外が残存している。口径と胴部最大径がほぼ同じで，口縁部下端は粘土帯付加により下方へ拡張しており，断面には接合痕が明瞭に観察される。胴部はやや潰れた球形を呈する。外面全体に細かな横位ヘラミガキが施されているが，肩部のみ放射状ミガキである。体部内面は粘土帯を圧着した後，ハケと指頭圧により整えられる。６は胴部を欠くが，頸部以上と底部が残存している。外面にはヘラミガキ，内面にはハケと指頭圧痕，頸部に絞り目が観察される。口縁部のヘラミガキが縦位，頸部はヨコナデとなり，肩部のヘラミガキが横位となっていることが，調整における５との違いである。口縁部下端は剥落するものの，粘土を付加して垂下させた痕が明瞭に残っている。底面は焼成前穿孔が施されており，ヘラ状工具による条痕が観察できる。２・３とは違い，ヘラ状工具による掻き取りは二段階にわけて行われている。７は肩部から胴部にかけて残存している。外面にはヘラミガキ，内面には指頭圧痕が認められる。８は底部である。外面に縦位ヘラミガキ，内面にハケ，底面には焼成前穿孔が施される。ヘラ状工具による掻き取りは７と同様，二段階にわけて行われている。５～８とも外面には赤色顔料の塗彩がみられ，葬送祭祀用の土器であることがわかる。

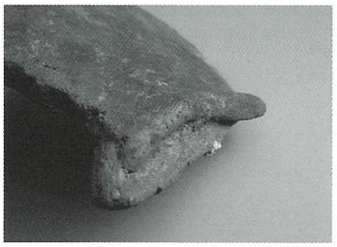
９～13は細片であるが，特徴的に上述の土器類と時期が近いと考えられるものである。９～11はＴ－２から出土した。９は甕の口縁部である。内外をナデで整えており，垂直に近い角度で上方に立



第 15 図　茶臼嶽古墳出土土器①（S＝1/3）



第16図　土器1口縁部下端

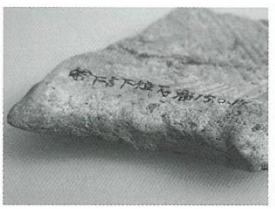


第17図　土器5口縁部下端

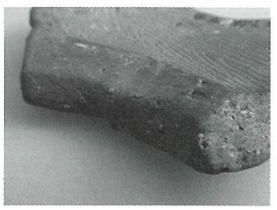
第18図　土器6口縁部下端

第19図
土器2底部焼成前穿孔

第20図
土器3底部焼成前穿孔



第21図
土器6底部焼成前穿孔



第22図
土器8底部焼成前穿孔

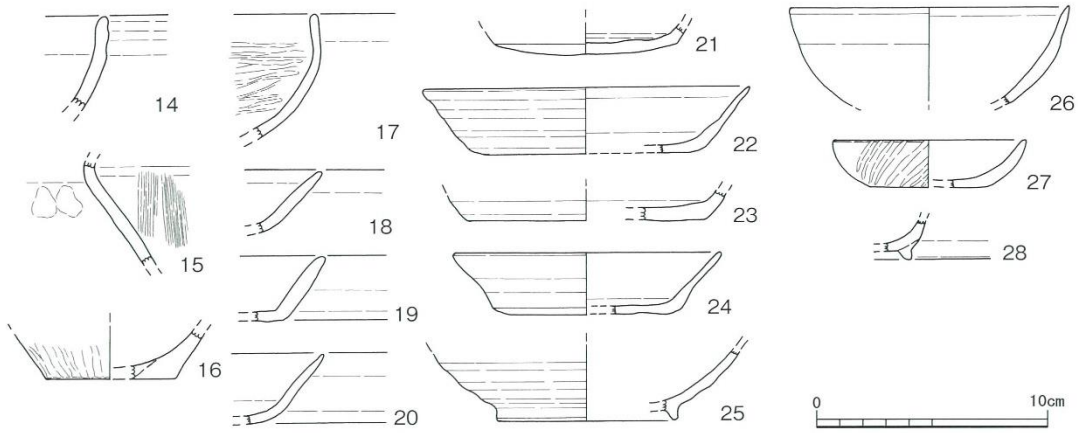
ち上がる。この時期一般的にみられる外面への擬凹線がなく，無文である。10・11は，接合しないが，胎土の特徴からおそらく同一個体である。厚手であり，破片の湾曲度合いが小さいことなどからみて，大型の土器棺と推定される。10は口縁部片，11は胴部片であろう。色調は他の出土土器と比べて赤みが少ない褐色を呈し，金雲母を多く含むなど，明らかに胎土が異なる。現物比較は行えていないが，搬入品の可能性も考えられよう。図示していないが，同じような破片がT－1からも出土している。弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての大型土器棺は報告例が少なくないため，古墳築造前に周辺に埋葬された壺棺と考えたい。

12はT－6から出土した甕の口縁部である。外反し，内外ともヨコナデで整えられる。13はT－7から出土した甕の口縁部である。上方に弱く拡張し，断面は端部に向かって先細る。内外ともヨコナデで整えられる。9・12・13については，1～8と時期的に近いと考えられる特徴をもつことから古墳に伴う可能性がある。ただし，すべて細片状態で出土しており，遺存状況が1～8と比べて悪いことから，同時期・同様に墳丘から転落したとは考えにくい。古墳築造時に盛土内に混入した土器である可能性も否定できない。

古墳に伴わない土器（第23図）

各トレンチからは，弥生土器，古代土器の破片も出土した。14～16は弥生土器である。14はT－2から出土した鉢の口縁部で，内外にヨコナデが施されるほか，外面に2条の凹線文が観察される。15はT－4から出土した甕の肩部である。外面に細かなタテハケ，内面に指頭圧痕が観察される。16はT－7から出土した甕もしくは壺の底部である。平底であり，外面には縦位ヘラミガキ，内面にはヘラケズリが観察される。断面観察から，底面は粘土充填により作られている。これら弥生土器片の時期は弥生時代中期中葉から後期前葉頃と考えられる。周辺にかつて存在した弥生時代の遺構が古墳築造にあたって削平され，その土が盛土に使われたことにより，墳丘に混入したものと推定される。

17～28は古代土器で，すべて土師質のものである。17～21はT－4，22～27はT－5，28はT－6から出土した。17・26のような内面黒色土器椀，18～24のような杯，25・28のような高台



第23図　茶臼嶽古墳出土土器②（S＝1/3）

付きの杯，27のような皿などが出土しており，概ね８～９世紀代を中心とする時期のものであろう。古代の土器類は，主に後方部寄りのトレンチから出土していることから，後方部墳頂が再利用されたと考えられる。

第２節　土器の製作時期について

本古墳出土の遺物は土器のみであり，埴輪類は認められないことから，埴輪導入以前の古式古墳であることがわかる。器種構成としては壺が主体となり，特に１～３・５～８は畿内系二重口縁壺で，いわゆる桜井茶臼山型（以降，桜井型壺と呼ぶ。）とされるものである。そのため，土器の時期についても桜井型壺を中心に考えることとしたい。

まず，茶臼嶽古墳で出土した桜井型壺の特徴について，改めて整理する。プロポーションについて述べると，５・６をみると口径・胴部最大径が近く，頸部は６がやや上方に開く形であるが，ほぼ直立し，大きく外反する口縁部へと続く。３・５・６をみると，胴部はやや潰れた球形を呈し，最大径も中程にくるようである。

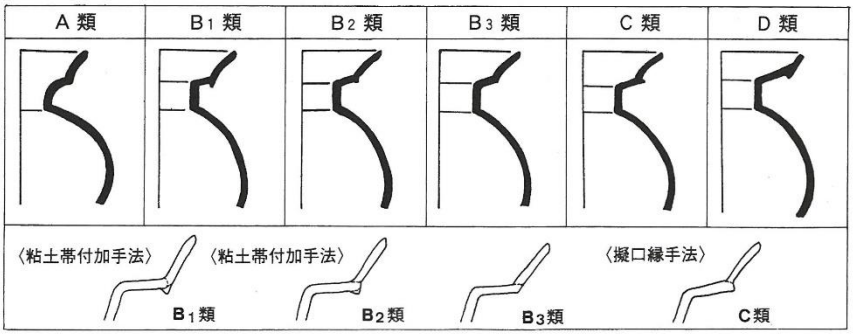
外面及び口縁部内面についてはすべて無文で，丁寧なヘラミガキを施す点で共通している。更に細かくみると，口縁部から頸部外面のヘラミガキは，５が横方向であるのに対し，６は縦位となっている。横位胴部外面はすべて横位ヘラミガキだが，５・７はその後肩部付近に縦位ヘラミガキが施されている。８は底部付近を放射状ミガキで整えているようである。青山博樹氏は，弥生時代後期から古墳時代前期の底部穿孔壺祭祀の変遷を整理しているが（青木 2004），底部穿孔壺は，当初において装飾壺が多く用いられたことから，装飾の意味合いも備えたミガキ調整をもつことを古手の特徴としている。

胴部内面は，５・７では粘土帯の継ぎ目や指頭圧痕，ハケなどが観察されるのに対し，３では横位ヘラケズリとなっている。内面の底部付近は，２・３・６・８に底面焼成前穿孔が施されるが，６・８はヘラ状工具による掻き取りが二段となっており，掻き取り直前の調整は２・６・８が粗いハケである。以上のように，各部の特徴には細かな違いがみられる。

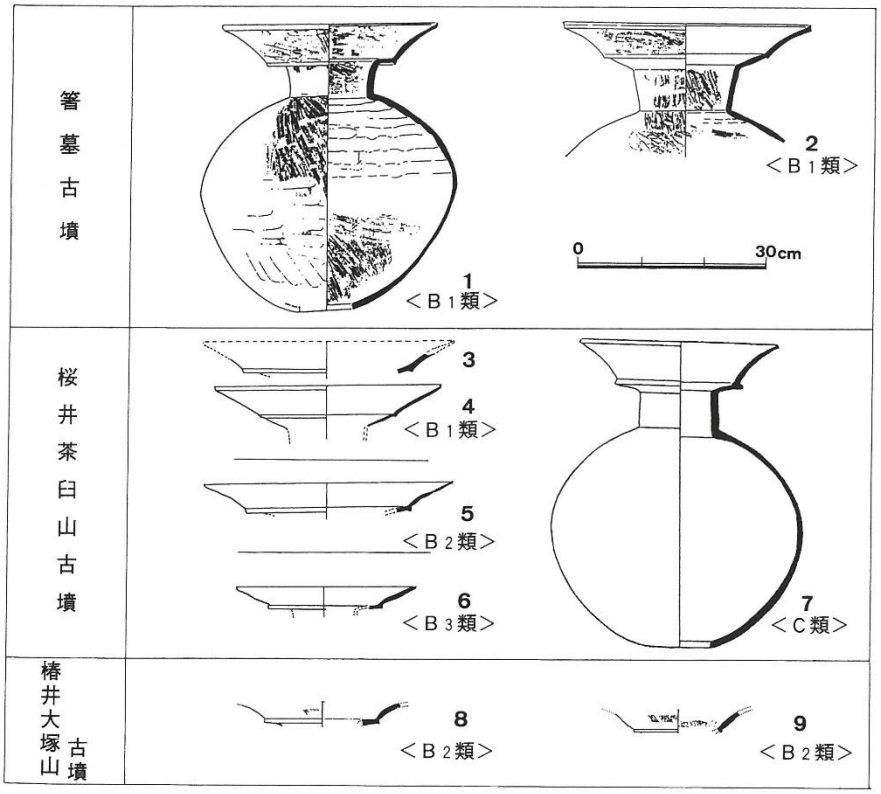
続いて，時期的特徴を示すものとして口縁部下端のつくりに注目したい。茶臼嶽古墳出土桜井型壺

の口縁部下端のつくりをみると，５・６が貼付により垂下させている。しかし，６については口縁部下端を貼付垂下させてはいるが，二次口縁の製作上，５よりも一次口縁への依存度が高いようで，粘土帯付加による垂下の度合いも弱い。１については，口縁部下端の垂下はなく，擬口縁手法に近いつくりである。

桜井型壺の同部位に着目した考察は野々口陽子氏によって行われている（野々口 1996）。口縁部の接合方法は６種類に分類可能であり（第 24 図），奈良県箸墓古墳でＢ１類，同県桜井茶臼山古墳でＢ１～３類・Ｃ類がみられ，Ｂ類はＣ類に先行するとされている（第 25 図）。中間の時期と考えられる奈良県葛本弁天塚古墳の壺はＢ類のようである。また，野々口氏の説く変遷が岡山県内でも大筋で対応することが示されている（小郷 2000）。

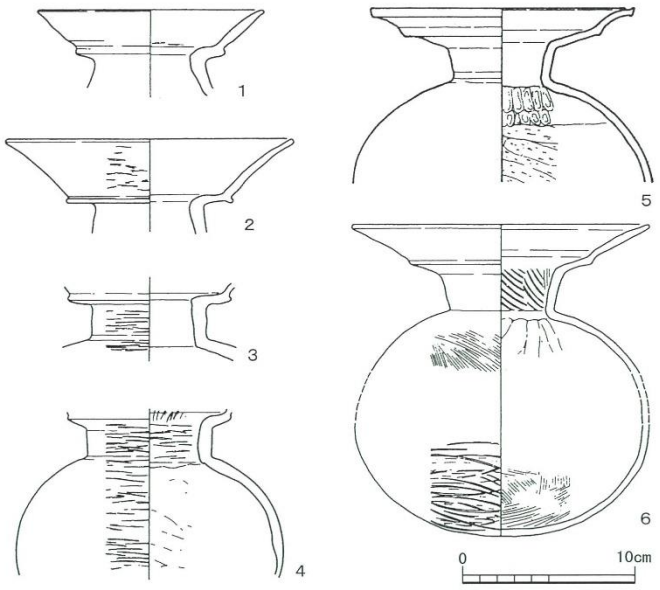


第 24 図 「畿内系」二重口縁壺の基本型式（野々口 1996 より）



第 25 図 茶臼山型式の比較（野々口 1996 より）

茶臼嶽古墳出土の壺については，１がＢ３類，５がＢ１類，６がＢ２類と捉えることができる。二重口縁壺のみで評価するならば，Ｃ類の出土した桜井茶臼山古墳よりは築造時期が古くなることが想定される。岡山県内の古墳における二重口縁壺の出土例としては，備前地域で都月坂１号墳，金蔵山古墳，美作地域で川東車塚古墳，日上天王山古墳，田邑丸山２号墳などがあるが，そのほとんどは茶臼嶽古墳出土の壺に比べて大型で，形態等の点でも差異が大きく，むしろ，備中地域の集落出土例である矢部南向遺跡竪穴住居 62 上層，奥坂遺跡 No.82 袋状土壙，津寺遺跡中屋調査区竪穴住居 143 などの方が，特徴的に類似するものが出土している（第 26 図）。



第 26 図　二重口縁壺の類例（Ｓ＝1/4）

（１～４：矢部南向遺跡竪穴住居62上層，５：奥坂遺跡No.82袋状土壙，６：津寺遺跡中屋調査区竪穴住居143）

※図面は各報告書より転載

これらの集落出土例は，在地編年上の位置づけで，高橋護編年Ｘ－ｃ～ｄ期，亀川上層式前後の範疇で捉えられる土器と供伴する（高橋 1988，島崎編 1995，亀山 2006 など）。更に，野々口氏の分類を適用すると，矢部南向遺跡はＣ類となり，奥坂遺跡・津寺遺跡もＣ類と捉えることができる。いずれも擬口縁手法を用いる点で，茶臼嶽古墳出土の桜井型壺よりは時期的に新しいと判断されることから，茶臼嶽古墳出土桜井型壺の時期はＸ－ｃ期以前と推定される。

また，桜井型壺ではない４のような形態の壺も，集落域においては一般的にみられ，古墳では兵庫県権現山 51 号墳で出土例がある。４の時期は，細部の特徴から高橋編年でいうところのＸ－ｃ期相当とみなすことができるが，権現山 51 号墳のものがＸ－ｂ期まで遡る可能性を評価されていることを考えれば，茶臼嶽古墳が若干新しくなる可能性がある。

茶臼嶽古墳出土壺が相当するであろう高橋編年Ｘ－ｃ期前後，亀川上層式周辺の時期は，畿内の編年ではいつ頃に相当するであろうか。畿内の土器編年も細分方法によって研究者の考えに違いがあるが，茶臼嶽古墳の土器は，布留０式（新相），布留式古段階古相を中心とした時期に並行すると捉えることができそうである（寺沢 1986，西村 2011，河合 2015 など）。古墳の具体例を挙げると，奈良県箸墓古墳と同県桜井茶臼山古墳の間に入り，奈良県葛本弁天塚古墳と同時期と思われる。年代観としては，箸墓古墳が３世紀中頃，葛本弁天塚古墳が３世紀第３四半期頃，桜井茶臼山古墳が３世紀後半頃と推定されていることを参考にするならば（西村 2011），土器からみた茶臼嶽古墳の築造時期は３世紀後半頃と考えることができよう。

参考文献

青木博樹「底部穿孔壺の思想」『日本考古学』第18号　日本考古学協会　2004年

尾上元規「前期古墳出土土器集成【岡山県】」『前期古墳編年を再考するⅡ』中国四国前方後円墳研究会第18回研究集会（香川大会）実行委員会　2015年

小郷利幸『田邑丸山古墳群　田邑丸山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集　津山市土地開発公社・津山市教育委員会　2000年

亀山行雄「第4節　古墳時代初頭の土器」『津寺遺跡3』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104　岡山県教育委員会　1996年

亀山行雄「吉備地域の古式土師器」『古式土師器の年代学』財団法人大阪府文化財センター　2006年

亀山行雄・大橋雅也編『津寺遺跡4』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告116　岡山県教育委員会　1997年

河合　忍「山陽東部」『前期古墳編年を再考するⅡ』中国四国前方後円墳研究会第18回研究集会（香川大会）実行委員会　2015年

君嶋俊行「2．土師器」『川東車塚古墳の研究』吉備人出版　2004年

君嶋俊行「付篇2　中国・四国地方の二重口縁壺形土器集成」『川東車塚古墳の研究』吉備人出版　2004年

君嶋俊行「古墳出土土器が示す年代」『前期古墳編年を再考するⅡ』中国四国前方後円墳研究会第18回研究集会（香川大会）実行委員会　2015年

倉林眞砂斗・澤田秀実・君嶋俊行編『川東車塚古墳の研究』美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅱ　吉備人出版　2004年

近藤義郎・倉林眞砂斗・澤田秀実編『日上天王山古墳』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第60集　津山市教育委員会・日上天王山古墳発掘調査委員会　1997年

近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究』第13巻第3号　考古学研究会　1967年

島崎　東編『足守川加茂A遺跡　足守川加茂B遺跡　足守川矢部南向遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告94　岡山県教育委員会　1995年

高橋　護「弥生時代終末期の土器編年」『岡山県立博物館研究報告』第9号　岡山県立博物館　1988年

高畑知功・福田正継編『天神坂遺跡　奥坂遺跡　新屋敷遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告53　岡山県教育委員会　1983年

寺沢　薫「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所　1986年

豊岡卓之「附篇1　葛本弁天塚古墳」『中山大塚古墳』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第82冊　奈良県教育委員会　1996年

中田宗伯「2）土師器」『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会　1991年

西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告1　倉敷考古館　1959年

西村　歩「土師器の編年　③近畿」『古墳時代史の枠組み』古墳時代の考古学1　同成社　2011年

野々口陽子「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第3集　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター　1996年

柳瀬昭彦「Ⅴ　結語」『川入・上東』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告16　岡山県教育委員会　1977年

第５章　総括

第１節　墳丘形態について

墳丘の復元（第 27 図）

今回の調査では，推定も含めて，Ｔ－３，Ｔ－４を除くトレンチで墳端の位置をおさえることができた。また，Ｔ－１，Ｔ－５～７の各トレンチでは，段築の手掛かりとなるテラス面を検出することができた。前方部と後方部のコーナーやくびれ部に関する情報は未だ少ないが，トレンチ調査で得られた成果と，現地観察の知見を合わせて墳丘の復元を試みたい。

まず前方部であるが，Ｔ－１，Ｔ－７での調査結果により，基本的には２段築成と考えられる。先端部は北側が大きく崩れているが，南側はＴ－２で推定された墳端の位置，Ｔ－３よりも墳端が上方にあると考えられること，地表に露出している葺石の並び，等高線から撥形状に復元が可能である。撥形前方部は奈良県箸墓古墳に代表されるように，最古型式の古墳の指標であり，茶臼嶽古墳で出土した土器からみた時期とも符号する。

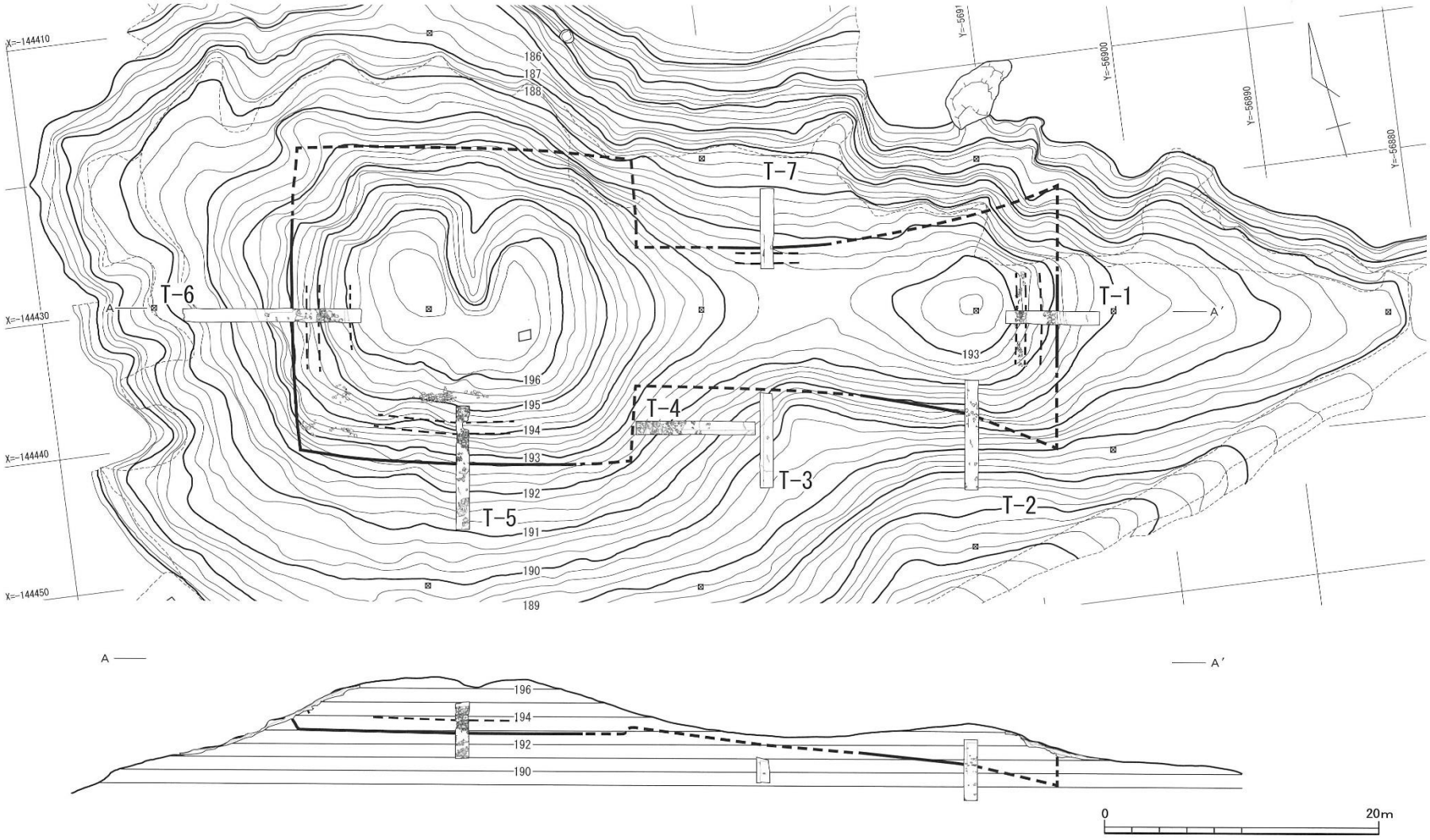
くびれ部周辺については，Ｔ－４よりも墳端が上方にあると考えられることから，推定復元線を図のように引くことができる。後方部については，Ｔ－５で検出した墳端位置と，等高線から南端の線を引くことができ，Ｔ－６の調査結果から，西端の線を引くことができる。南西コーナーについても，南端，西端の線と，地表に露出する葺石，等高線の走りを手掛かりに，図のように復元可能である。くびれ部から後方部の北側はトレンチを設けていないため，他のトレンチでの調査結果や，等高線等から推定するしかないが，おおむね図のようになると考えられる。

これを基に側面図も復元すると，南側からみた墳丘は前方部側に向かって下がる形であり，特にくびれ部付近は低平になると考えられる。墳端レベルだけをみれば，各所でばらつきがあり揃っていないが，復元される平面形は歪ではない。古墳の築造にあたって平面観を重視した地割がなされたが，地形的制約を受けて結果的に墳端位置のばらつきが生じたと理解したい。

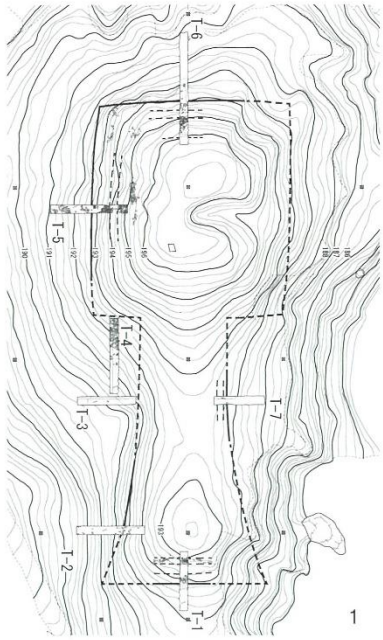
茶臼嶽古墳の墳長はＴ－１，Ｔ－６で検出した墳端間距離から 55.4 ｍである。そして，これらはあくまで復元値であるが，後方部長は約 24.8 ｍ，後方部幅は約 22.8 ｍ，前方部長は約 30.6 ｍ，前方部幅はくびれ部付近で約 9.6 ｍ，先端部付近で約 19.2 ｍとなる。長さの比率は後方部：前方部≒４：５となり，古式古墳としては，若干前方部が長くなるようである。

前方後方墳他例との比較

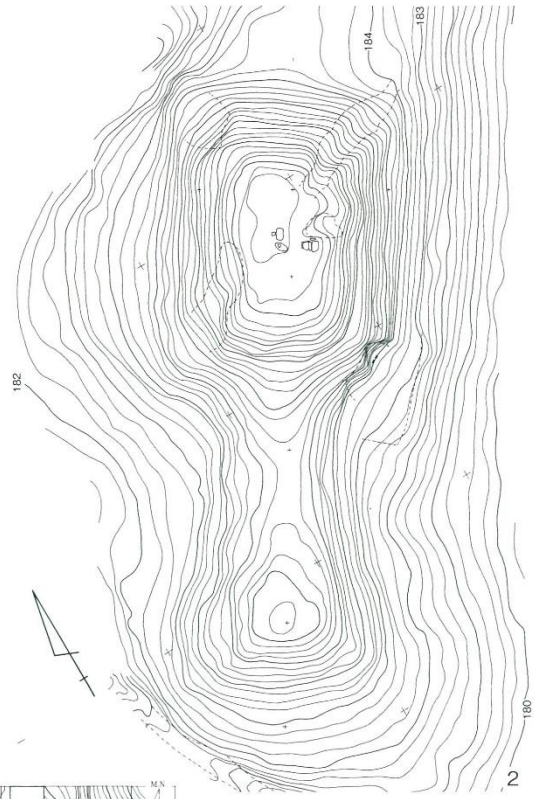
第 28 図に茶臼嶽古墳と時期が近く，発掘調査等により得られている情報の比較的多い古墳を示している。田邑丸山２号墳については前期後半で時期が離れるが，情報が多いことから例示した。また，権現山 50・51 号墳も他県ではあるが播磨で近いため例示している。築造時期が近い各古墳とも，基本的に前方部はいわゆる撥形状に開き，先端幅は後方部に対して若干狭くなる程度のようであり，茶臼嶽古墳も例外ではない。後方部の平面形については，備前車塚古墳のように正方形に近いもの，一丁坊１号墳や七つ坊１号墳のように長方形に近いものなどがあり，茶臼嶽古墳の後方部形態はどちらとも捉えうるものである。少なくとも近接する茶臼嶽古墳と一丁坊１号墳では，長方形へと変化しているが，これが時期差によるのか立地等の差によるのか，現時点で判断する材料はない。



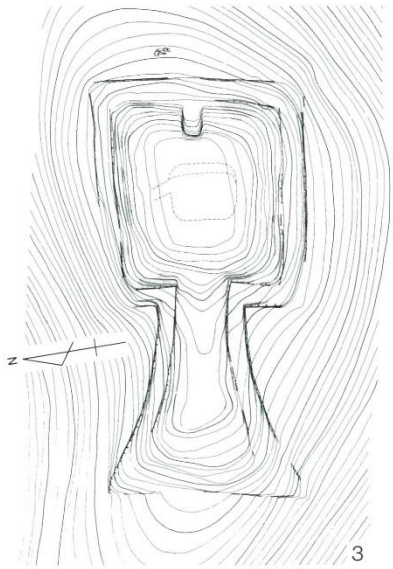
第 27 図　茶臼嶽古墳墳丘復元案（S＝1/400）



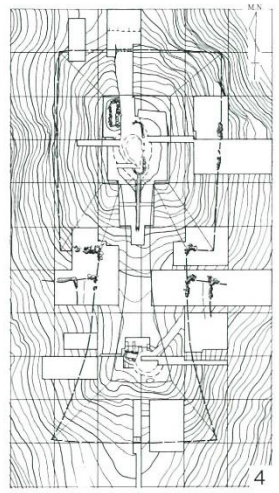
1



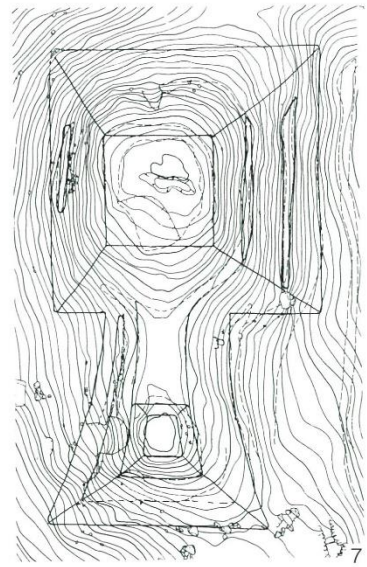
2



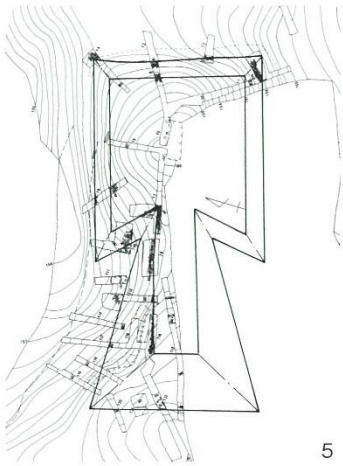
3



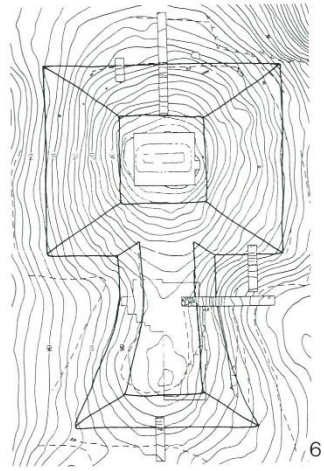
4



7



5



6

1　茶臼嶽古墳
2　一丁坑１号墳
3　備前車塚古墳
4　七つ坑１号墳
5　田邑丸山２号墳
6　権現山51号墳
7　権現山50号墳

※図面は各報告書より転載

0　20m

第 28 図　前方後方墳の諸例（S＝1/800）

第２節　秦地域における二大前方後方墳の評価

最後に，総社市秦地域の二大前方後方墳について述べる。今回調査した茶臼嶽古墳と近接する一丁坑１号墳，両者とも丘陵尾根頂部の眺望に優れたところに立地する単独墳で，大型の前方後方墳という共通点があるが，墳丘，葺石，出土遺物には大小の違いがみられる。今回の調査によって茶臼嶽古墳が一丁坑１号墳に先行することが明らかとなったことにより，その違いを時期的変化と捉えることができるようになった。

第一に，墳丘については，茶臼嶽古墳は各トレンチの状況や側面観から，墳丘成形は地山削り出しによる部分が大きいと考えられる。一丁坑１号墳は等高線図や現地観察からみて墳丘形態は整っており，前方部・後方部とも高さがあることから，相当量の盛土によって成形されていることが推定される。第二に，葺石について，茶臼嶽古墳では各トレンチでみられた石材の大きさも不揃いで，葺き方にも規則性のある箇所，ない箇所という不統一感があった。石材には角ばった山石を用いていた。一方で，一丁坑１号墳では比較的大きさも揃った，角のとれた石を各所で同じように葺いている。第三に，出土遺物について，茶臼嶽古墳では土器のみが出土し，壺形土器祭祀を行っていたことがわかる一方で，一丁坑１号墳では，普通円筒埴輪，朝顔形円筒埴輪，壺形埴輪，不明形象埴輪が出土しており，完全に埴輪を用いた祭祀へと移行している。これは，当該地域における土器祭祀から埴輪祭祀への転換が両者の時期の間で起こったことを示している。

第１表　岡山県前方後方墳一覧

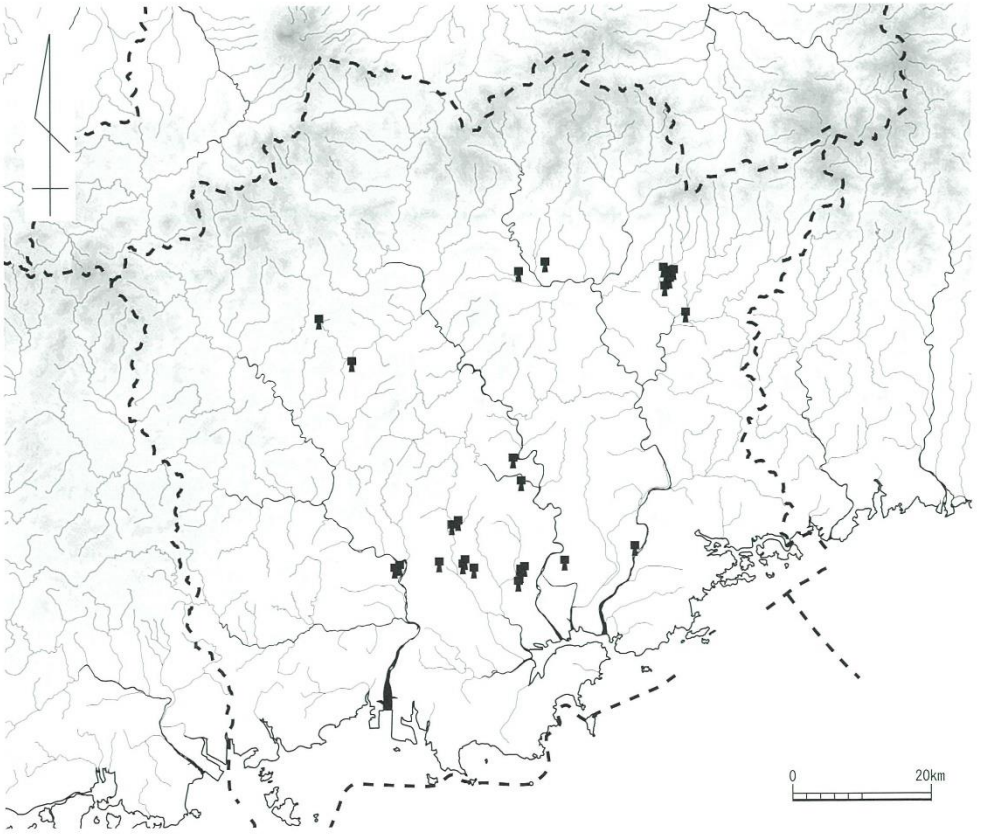
番　号	古　墳　名	所　在　地	墳長（m）	時　期	文　献
1	植月寺山古墳	勝央町植月	91.5	前期前半	近藤編1991b
2	一丁坑１号墳	総社市秦	70.0	前期前葉	谷山・高橋・村田編2014
3	美野高塚古墳	勝央町美野	65.0	前　期	倉林・澤田編2000
4	岡高塚古墳	勝央町岡	56.0	前　期	倉林・澤田編2000
5	茶臼嶽古墳	総社市秦	55.4	前期初頭	－
6	美野中塚古墳	勝央町美野	52.5	前　期	倉林・澤田編2000
7	諏訪神社裏古墳	美咲町原田	50.0（or53）	前期前半	倉林・澤田編2000
8	備前車塚古墳	岡山市四御神・湯迫	48.3	前期初頭	近藤編1991b
9	楢原寺山古墳	美作市楢原下	46.0	前　期	近藤編1991b
10	七つ坑１号墳	岡山市津島笹ヶ瀬・津島西坂	45.1	前期初頭	近藤編1991b
11	菅２号墳	岡山市高津菅	44.0	前期前半	近藤編1991b
12	西宮神社裏古墳	勝央町美野・田井西宮	44.0	前　期	倉林・澤田編2000
13	荒木山東塚古墳	真庭市上水田荒木	43.0	前期前半	近藤編1991b
14	田井高塚古墳	勝央町田井	42.0	前　期	倉林・澤田編2000
15	西坂古墳	岡山市西原	40.0	前　期	近藤編1991b
16	田邑丸山２号墳	津山市下田邑	40.0	前期後半	小郷2000
17	津倉古墳	岡山市京山	39.0	前期前半	光本編2016
18	久米三成４号墳	津山市中北下	35.0	中期前半	近藤編1991b
19	都月坂１号墳	岡山市津島本町	33.0	前期初頭	近藤編1991b
20	久米10号墳	総社市久米	32.9	前　期	近藤編1991b
21	小田鼻古墳	真庭市上呰部	32.0	中期後半	近藤編1991b
22	大崎西１号墳	岡山市門前	30.0	前期前半	近藤編1991b
23	石津神社裏山２号墳	岡山市吉井	30.0	中期後半	近藤編1991b
24	上土田４号墳	岡山市上土田・下足守	27.0	前期前半	近藤編1991b
25	大崎西２号墳	岡山市大崎	26.6	前期前半	近藤編1991b
26	上土田１号墳	岡山市上土田	26.5	前期前半	近藤編1991b
27	七つ坑５号墳	岡山市津島笹ヶ瀬	25.0	前期後半	近藤編1991b

上述した三点から，一丁坑１号墳はより定型的な古墳として捉えることができる。茶臼嶽古墳の頃には，畿内政権を中心として配布された古墳の造り方に関する情報が浸透しておらず，独自色ともいえるような特徴を備えていたものが，徐々に築造上の技術やルールが普及し，一丁坑１号墳の築造にあたってその知識が発揮されたと考えられる。両古墳の変遷から，地方における大型古墳が定型化していく過程の一端が窺えるといえる。前方後方墳という，前方後円墳の下位に位置づけられることの多い墳形ではあるが，茶臼嶽古墳から一丁坑１号墳になり墳丘規模が大きくなることは，古墳の定型化と合わせて当該地域の首長が畿内政権との関係を深めた結果と思われる。

古墳時代を通して11,000基を超える古墳が築造された岡山県域においても，他地域同様に前方後方墳が少数派の墳形であることは変わりない。岡山県内では，現在27基の前方後方墳が確認されている（第１表）。そのうち，24基は古墳時代前期の間に築造されたもので，中期に入ると築造数は激減し，後期には築造されなくなる。

分布状況としては，県南部の旭川中下流域・足守川上流域を中心とした地域，県北部の吉井川上流域を中心とした地域に，時期的にもまとまった分布がみられるが，それ以外は散発的な築造状況である（第29図）。古墳の規模は，勝央町などの県北部で比較的大型の前方後方墳の築造が目立つ。茶臼嶽古墳・一丁坑１号墳は県南で１，２番目の規模をもつ前方後方墳が続けて築かれていることを示しており，さらに総社平野及び周辺地域に限っていえば，前方後円墳を含めても最古級の古墳による首長系列となる点が注目される。

一丁坑１号墳の発見までは大型の前方後方墳は県北地域に多く見つかっており，高梁川以西の地域



第29図　岡山県前方後方墳分布図（S＝1/1,000,000）

では前方後方墳自体が確認されていなかった。その空白地域に，４世紀前半頃築造の一丁坑１号墳，３世紀後半頃築造の茶臼嶽古墳が立て続けに発見された。しかも，近接する両者の比較によって古墳時代前期段階における前方後方墳の特徴の明瞭な変遷が追えることの意義は大きい。総社市内では1900基余りもの古墳が確認されているが，弥生墳丘墓か古墳か，評価の曖昧な宮山墓を除けば，茶臼嶽古墳は古墳として現時点で最大・最古のものであり，それが前方後方墳という少数派の形態であることは興味深い。

同一山塊上に近接して築かれた前期古墳として，三角縁神獣鏡でも古式の四神四獣鏡を出したとされる秦上沼古墳，全長63ｍの前方後円墳で，古手の特徴をもつ埴輪が採集されている秦大坑古墳との関連性も問題となろう。前方後円墳である秦大坑古墳と前方後方墳２基が，同一の首長系列となるのか，備前南部でみられるように，並行する時期に別々の首長系列が展開された状況を示すのか，今後の重要な研究課題である。

参考文献

宇垣匡雅「④中国」『古墳出現と展開の地域相』古墳時代の考古学２　同成社　2012年

小郷利幸『田邑丸山古墳群　田邑丸山遺跡』津山市埋蔵文化財発掘調査報告第67集　津山市土地開発公社・津山市教育委員会　2000年

倉林眞砂斗・澤田秀実編『美作の首長墳　墳丘測量調査報告』美作地方における前方後円墳秩序の構造的研究Ⅰ　吉備人出版　2000年

近藤義郎・鎌木義昌「109　備前車塚古墳」『岡山県史』第十八巻考古資料　岡山県　1986年

近藤義郎編『七つ坑古墳群』七つ坑古墳群発掘調査団　1987年

近藤義郎編『権現山51号墳』権現山51号墳刊行会　1991年ａ

近藤義郎編『前方後円墳集成』中国・四国編　山川出版社　1991年ｂ

田中　裕「②前方後方墳の歴史性」『墳墓構造と葬送祭祀』古墳時代の考古学３　同成社　2011年

谷山雅彦・高橋進一・村田　晋編『一丁坑古墳群』総社市埋蔵文化財発掘調査報告23　総社市教育委員会　2014年

光本　順編『津倉古墳　第１次調査発掘調査概要報告』岡山大学大学院社会文化科学研究科　2016年

第2表　遺物一覧

No.	種　別	出土地点	器　種	口径(cm)	最大幅(cm)	底径(cm)	器高(cm)	調　整	特　徴	色　調	胎　土
1	土師器	T－1	壺(口縁部)					内外ヘラミガキ	桜井型二重口縁壺	5YR7/8（橙）	径1.0mmの石英・長石・赤色土粒
2	土師器	T－1	壺(底部)			5.6		外ミガキ，内ハケ	桜井型二重口縁壺 焼成前穿孔	外10R6/6（赤橙） 内5Y6/1（灰）	径0.5～2.5mmの石英・長石・赤色土粒
3	土師器	T－4	壺(体部)		21.8	9.0		外ミガキ，内ヘラケズリ→ナデ	焼成前穿孔	5YR7/6（橙）	径1.0～5.0mmの石英・長石・赤色土粒（多）
4	土師器	T－5	壺	21.2				外ハケ→ナデ，内ヘラケズリ→ナデ		7.5YR7/4（にぶい橙）	径0.1～0.3mmの石英・長石，径0.5～1.0mmの長石
5	土師器	T－5	壺	20.8	20.2			外ミガキ，内ミガキ・ハケ・指頭圧	桜井型二重口縁壺	外2.5YR6/8（橙） 内10YR8/4（浅黄橙）	径0.5mmの石英・長石・赤色土粒
6	土師器	T－5	壺	20.2		6.8		外ミガキ，内指頭圧・ハケ→ヘラケズリ	桜井型二重口縁壺 焼成前穿孔	外10R6/6（赤橙） 内5YR7/8（橙）	径1.0～2.0mmの石英・長石・赤色土粒（多）
7	土師器	T－5	壺(胴部)		19.0			外ミガキ，内指頭圧	桜井型二重口縁壺	外2.5YR6/6（橙） 内5Y4/1（灰）	径1.0～3.0mmの石英・長石
8	土師器	T－5	壺(底部)			7.2		外ミガキ，内ハケ→ヘラケズリ	桜井型二重口縁壺 焼成前穿孔	外5YR5/4（にぶい赤褐） 内7.5YR6/4（にぶい橙）	径0.5～2.0mmの石英・長石，径0.1mmの角閃石
9	土師器	T－2	甕(口縁部)					内外ナデ		7.5YR8/6（浅黄橙）	径0.2mmの石英・長石・角閃石・赤色土粒
10	土師器	T－2	土器棺？(口縁部)					内外ナデ	搬入品？	7.5YR5/4（にぶい褐）	径0.5～1.5mmの石英・長石・角閃石・金雲母（多）
11	土師器	T－2	土器棺？					外ハケ，内ケズリ→ハケ	搬入品？	7.5YR5/4（にぶい褐）	径0.5～1.5mmの石英・長石・角閃石・金雲母（多）
12	土師器	T－6	甕(口縁部)					内外ナデ		10YR7/4（にぶい黄橙）	径0.5mmの石英・長石・角閃石
13	土師器	T－7	甕(口縁部)					内外ナデ		外5YR7/4（にぶい橙） 内2.5Y5/1（黄灰）	径0.5mmの石英・長石・赤色土粒
14	弥生土器	T－2	鉢(口縁部)					内外ナデ	凹線文	外10YR8/6（黄橙） 内10YR4/1（褐灰）	径1.0～3.0mmの石英・長石
15	弥生土器	T－4	甕(肩部)					外ハケ→ナデ，内指頭圧・ナデ		10YR7/4（にぶい黄橙）	径0.5mmの石英・長石・角閃石（多）
16	弥生土器	T－7	甕or壺(底部)			5.6		外ミガキ，内ヘラケズリ	平底，粘土充填	10YR5/3（にぶい黄褐）	径1.0～2.0mmの石英・長石，径0.3mmの角閃石
17	古代土器	T－4	椀(口縁部)					外ナデ，内ミガキ	内面黒化	外10YR8/4（浅黄橙） 内5Y4/1（灰）	径0.2～0.5mmの石英・角閃石
18	古代土器	T－4	杯(口縁部)					内外回転ナデ		10YR8/4（浅黄橙）	径0.5mmの石英
19	古代土器	T－4	杯				2.9	内外回転ナデ	断面黒色	10YR8/4（浅黄橙）	径0.5mmの石英・角閃石
20	古代土器	T－4	杯				3.1	内外回転ナデ		外10YR8/4（浅黄橙） 内7.5YR8/4（浅黄橙）	径0.2mmの石英
21	古代土器	T－4	杯(底部)			8.0		外回転ヘラ切り？		10YR7/4（にぶい黄橙）	径0.2～1.0mmの石英・長石・角閃石
22	古代土器	T－5	杯	14.4		8.8	2.9	内外回転ナデ		10YR8/6（浅黄橙）	径0.5～2.0mmの石英・長石・角閃石
23	古代土器	T－5	杯(底部)			10.2		外ヘラ切り・ナデ，内ナデ		7.5YR7/4（にぶい橙）	径0.2～0.5mmの石英・長石・角閃石・金雲母
24	古代土器	T－5	杯	11.6		8.2	2.7	外ヘラ切り・ナデ，内ナデ		5YR7/4（にぶい橙）	径0.5～1.5mmの石英・長石・角閃石・赤色土粒
25	古代土器	T－5	杯			7.8		内外回転ナデ		7.5YR7/6（橙）	径0.2～0.5mmの石英・長石・角閃石・赤色土粒
26	古代土器	T－5	椀(口縁部)	12.2				内外回転ナデ	内面黒化	外7.5YR7/6（橙） 内2.5Y4/1（黄灰）	径0.5～1.0mmの石英・長石
27	古代土器	T－5	皿	8.4		5.2	2.1	内ナデ	連続押圧文	10YR8/4（浅黄橙）	径1.0～2.0mmの石英・長石
28	古代土器	T－6	杯(底部)					内外回転ナデ	断面黒色	10YR8/4（浅黄橙）	径1.0mmの石英

図版1

1　古墳遠景（南東から）

2　古墳近景（南東から）

3　古墳近景
（前方部から後方部）

１　古墳近景
（後方部から前方部）

２　後方部墳頂盗掘坑
（南から）

３　Ｔ－１近景（南東から）

図版３

１　Ｔ－１墳端溝検出状況
（北から）

２　Ｔ－１北壁墳端付近
（南から）

３　Ｔ－２近景（南から）

１　Ｔ－２断ち割り状況
（南東から）

２　Ｔ－２西壁墳端付近
（東から）

３　Ｔ－３近景（南東から）

図版５

１　Ｔ－３西壁落込み付近
（東から）

２　Ｔ－４近景（東から）

３　Ｔ－４岩盤検出状況
（南東から）

１　Ｔ－４南壁（北から）

２　Ｔ－４南壁落込み付近
（北から）

３　Ｔ－５近景（南から）

図版７

１　Ｔ－５西壁墳端付近
（東から）

２　Ｔ－５土器出土状況
（南から）

３　Ｔ－６近景（西から）

１　Ｔ－６葺石検出状況
（西から）

２　Ｔ－６断ち割り状況
（南西から）

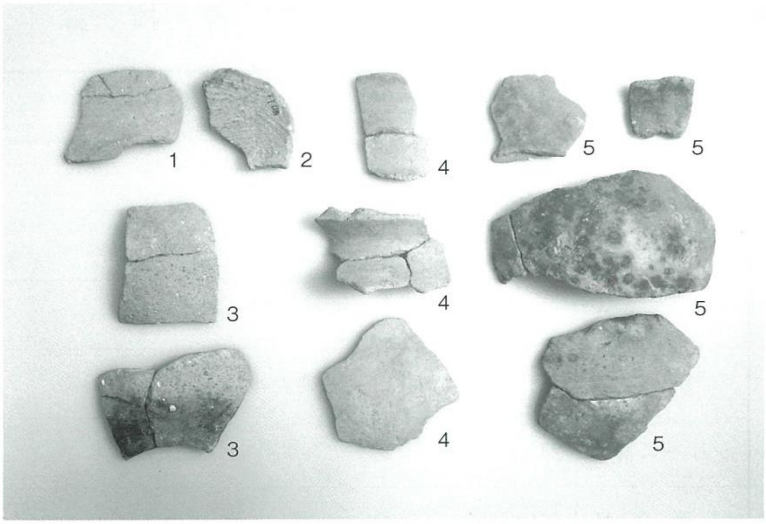
３　Ｔ－６北壁墳端付近
（南から）

図版９

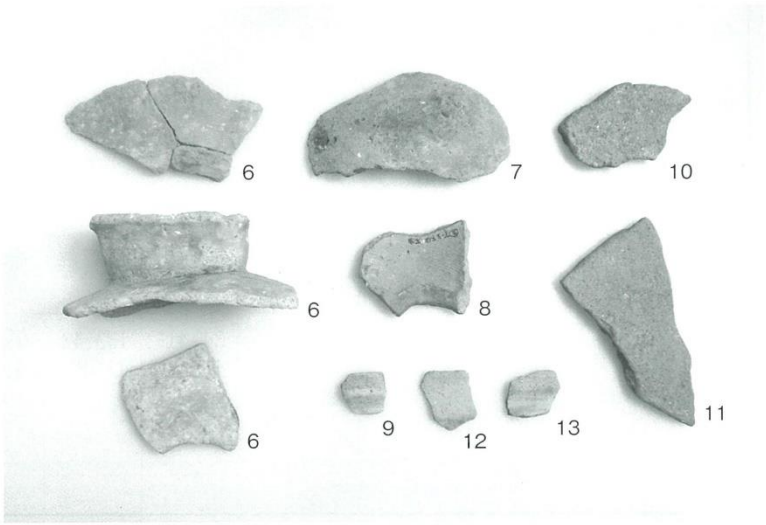
１　Ｔ－７近景（北から）

２　Ｔ－７断ち割り状況
（北東から）

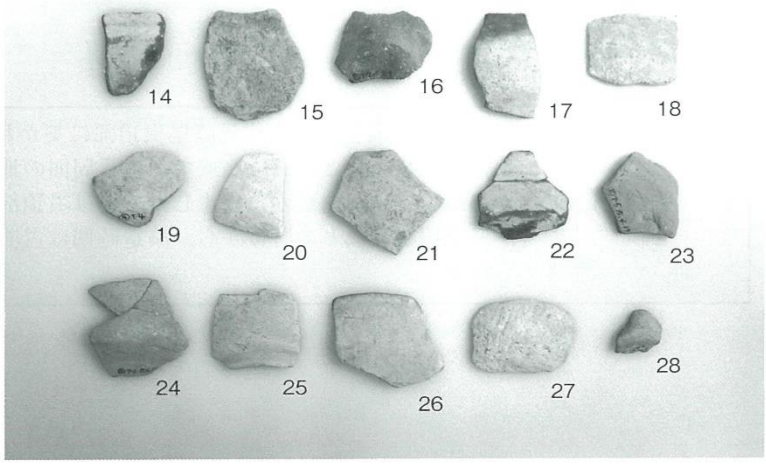
３　Ｔ－７西壁墳端付近
（東から）



1　各トレンチ出土土器①



2　各トレンチ出土土器②



3　各トレンチ出土土器③

報　告　書　抄　録

ふりがな	ちゃうすだけこふん
書　　名	茶臼嶽古墳
副 書 名	確認調査報告書
巻　　次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	24
編著者名	村田　晋
編集機関	岡山県総社市教育委員会
所 在 地	〒719-1192　岡山県総社市中央一丁目１番１号　TEL 0866-92-8363
発行年月日	2016（平成28）年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
ちゃうすだけこふん 茶臼嶽古墳	おかやまけん 岡山県 そうじゃし 総社市 はだ 秦	33-208		34°41′46.89″	133°42′41.78″	平成27年４月６日～７月９日	約59㎡	史跡整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
茶臼嶽古墳	古墳	３世紀後半	葺石，区画溝	土器（二重口縁壺，甕など）	

要　　約	東側眼下に高梁川を見下ろす丘陵尾根頂部に築かれた，墳長55.4ｍの前方後方墳。前方部，後方部とも二段築成で，墳丘周囲の地形も築造時に加工された可能性がある。各トレンチから出土した土器は墳頂部から転落した状況を示しており，二重口縁壺などの特徴から，築造時期は古墳時代初頭，３世紀後半頃と考えられる。

総社市埋蔵文化財発掘調査報告 24

茶臼嶽古墳

墳丘確認調査報告

平成 28（2016）年 3 月 31 日印刷

平成 28（2016）年 3 月 31 日発行

編集発行　岡山県総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目 1 番 1 号

印　　刷　柳本印刷株式会社
岡山県総社市総社一丁目 10 番 24 号